
ライト・プリンガー 1 ~ 蒼光 6 ~

白銀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ライト・プリンガー1〜蒼光6〜

【コード】

N8904C

【作者名】

白銀

【あらすじ】

動乱の時代を迎える世界の中で、光たちは己の信じた道を戦い続けていた。亀裂が生じ始めていることに、気付かないまま……。

序章

序章 「加速する時代」

能力者という存在が明るみに出て、二ヶ月が経とうとしている。今まではごく一部の限られた者だけがその存在を知っていた。ただ、その者たちが能力者の存在を知っていたのは、その力の危険性に対抗するためであった。

具現力と呼ばれる、それぞれに異なる力を持つ能力者は、危険な存在だ。現代の兵器で戦うのは困難を極める。それでも、世界は能力者たちと戦う道を選んだ。

「ハウンド・デイスタンス中佐、入ります」

執務室のドアを開く前に一度ノックして、ハウンドは部屋の中へと足を踏み入れた。

部屋の中には、軍服を身につけた厳つい顔の男と、ラフな服装をした一人の女性の姿があった。

短い白髪を撫で付けた男は、部屋の奥にある大きい机に両肘をつけて手を組んでいる。顔に大きな傷があり、身体は大柄で筋肉質だ。眼光は鋭く、六十近い歳を感じさせない。アルフレッド・カリスト少将だ。

女性の方は胸元の開いた黒のタンクトップに青いワイシャツを重ね着している。ワイシャツは前面をはだけたまま、ただ袖を通していただけといった感じだ。下はジーンズで、かなり使い込んだものであるのか一つ二つ穴が空いている。ウェーブのかかった長い髪を首の後ろで纏めており、眼鏡をしていた。態度は余り良いとは言えない。足を組んで机の上に投げ出しており、火はついていないものの、煙草を口に啜えている。

「……彼女は誰です？」

ハウンドはアルフレッドに尋ねた。

アルフレッドはハウンドの上官に当たるため面識はあるが、彼女には会ったことがない。何故、この場にいるのだろうか。

「今回の任務に必要な人材だ」

「フリーのジャーナリスト、ヴィクセンだ」

アルフレッドに続いて、女性はそう言ってハウンドを見上げた。

「それで、任務とは、何です？」

「この時期だ、予想はしているだろう」

ハウンドの言葉に、アルフレッドはそう返した。

能力者、VAN絡みのことであると察しがついている。中佐であるハウンドだけ呼び出したことを考えるなら、個別の任務ということだろうか。アルフレッド個人から話があると言われて来たのだから、単独の任務である可能性も考慮していた。

だが、ジャーナリストが必要とはどういうことだろうか。

「VANに関することだとは思っていますが、部外者が必要とはどういうことですか？」

「奴らと戦うためには、能力者の力は欲しいんじゃないのかい？」

ハウンドの言葉に答えたのは、ヴィクセンだった。

現在、能力者たちはVANとROVという二つの組織に二分化されていると言っても過言ではない。第三者的な立場を取る者も中にはいるようだが、VANの味方でないという点を考えればレジスタンス側に分類しても構わないだろう。

要は、VANに対抗するために反抗している能力者を世界の味方に着ける、ということか。

確かに、軍の力だけではVANとの前面对決には耐えられるかどうか怪しい部分がある。世界中の軍を総動員すれば数では勝るだろうが、能力者は単体で凄まじい戦闘力を発揮する。味方にできれば有利にはなるだろうが、果たして能力者が軍に従うだろうか。

「何が言いたい？」

少し苛立ちながら、ハウンドはヴィクセンに問う。

「こいつらの顔、見たことはないかってことさ」

そう言って、ヴィクセンは足を置いているテーブルにいくつかの写真をばら撒いた。

「これは……！」

ハウンドは目を見開いた。

写真に写っているのは、先月の中ほどに起きた戦闘の画像だった。ホテルの崩壊と、能力者同士の激しい戦いはニュースでも流されている。だが、はっきりと顔が映っていたのはVANの中でもトップクラスの實力を持つ能力者、シェイド・キャリヴァルスだけだ。彼と戦っていた少年の顔が映っているものはない。

「彼らの真意を聞き出し、味方に着きたい。そういうことだ」

アルフレッドの言葉を耳にしながら、ハウンドは写真に目が釘付けになっていた。

一振りの刀を手に、雷を纏いながらシェイドと戦う写真には『HAKURAI JIN』と書かれている。

そして、蒼白い瞳に敵意を宿し、一人でシェイドと拳を交える少年の写真には、『KASOU HIKARU』と名がメモされていた。

第一章

第一章 「激動の中で」

ここ一月の間に、VANと、それに立ち向かう者たちの名前は世界中に知れ渡ることになった。VANでは主に実働部隊の部隊長たちの名が、レジスタンスでは高い実力を持った者たちが、ニュースで報道されている。

かそうひかる 火蒼光、セルファ・セルグニス、やなぎしゆう 矢崎修、なかいゆき 仲居有希、おほろせいいち 臙聖一、五人の名は確実に知れ渡った。およそ一月前の、シェイドとの戦いが報道されたのだ。戦っていた場所が日本ではなく、アメリカであったことも大きく影響しているかもしれない。

能力者たちの存在に、一般人たちも慣れ始めているとさえ言えば変だが、VAN蜂起当初よりは混乱しなくなったのは確かだ。

あの戦いで、シェイドと戦う光やROVの姿が全世界に中継で流された。

VANのレジスタンスとして、ROVで知られた者の名は、リーはくらいしんダの白雷刃を始め、かながせかえで えんりゆうしやう金風楓、ひむろみずき焰龍翔、氷室瑞希の四名だ。シェイドの部下と戦っていた場面も報道されていたらしい。他にも、各国でROVの支部長という肩書きで名が晒されている者もいた。

あまり好ましいことではなかったが、ある程度覚悟はしていた。VANと戦うということとは、そういうことだ。

世界中に対して宣戦布告したとも取れるVANの蜂起宣言は、人々に大きな衝撃を与えた。同時に、世界各地でVANによるクーデターが発生し、世界は混乱することにもなった。

その組織を潰そうと言うのだから、光たちの名前が世界中に知られるのは時間の問題だった部分はある。アグニアは全世界の敵と認識されてもおかしくはないのだ。能力者から見ればカリスマ的存在かもしれないが、彼らの動きに反抗の意を表明する者は少なくない

だろう。能力者ではない一般人の中には、VANを恐れ、敵と見做し、排除を望む者が多いはずだ。

だから、この一月の間に世界は少しずつ、結論を出し始めた。世界各地でVANに対する徹底抗戦を宣言する国が現れ始めたのだ。その波紋は国連に広がり、既に世界はVANとの戦争に向かいつつある。

いや、既に戦争は始まっていた。世界各地でVANの部隊に対する攻撃が行われている。

もちろん、能力者を相手に戦う軍人たちが優勢とは言い難い。襲撃が成功しているところもあるようだが、大半は国連軍側が敗北している。勝利を得ても、VANの能力者を取り逃してしまう場合も少なくはない。

ホテルの一室に、光たちは泊まっている。名前や顔が知れ渡ったために、ホテル側はあまり良い顔はしなかった。だが、光たちが力を使って暴れることを恐れてか、宿泊拒否まではしていない。おどおどした態度は正直、不快だったが、それが一般人の反応だろう。簡単に殺される可能性があると思えば、それが自然だとも思う。

「……本当に、大丈夫？」

ドアの付近で、携帯電話の向こうにいる叔父、孝二へと光は問う。光の名前が知れ渡ったことで生じるのは、本人の問題だけではない。家族や親戚の周りでも問題が起きている。

要は、家族も同類と見られる可能性が高いということだ。

光の両親が死んだからには、父の弟である孝二と、その幼馴染の澤井香織が親代わりだった。光にとって家族と呼べる者は、兄である晃を除けば孝二と香織だけだろう。

「大丈夫って、何度言わせる気だ？」

孝二が呆れたように笑っているのが解った。

「でも、香織さんの身体に障ったら……」

孝二と香織は結婚している。かなり遅い結婚だったが、二人は幸せそうだった。結婚式は挙げずに、親しい者たちだけでささやかな

お祝いをした。その席に晁がいなかったことだけが、寂しかったが。香織は自分の住んでいたアパートを引き払い、孝二と暮らしている。即ち、光の家に。

そして、香織は妊娠していた。まだ二ヶ月目だが、身体に障ってはまずい。

『香織も大丈夫だつて言っているし、僕だつて彼女のこととは一番に考えるさ』

「……俺たちなんか知らないって言ってくれたっていいのに」

流石に、マスコミなども動き始めている。

光や修の家族に対して報道陣が来たことも一度や二度ではない。

下手をしたらノイローゼになっていてもおかしくはないはずだ。

だが、孝二も香織も、光を自分たちの家族だと言う。光の前だけでなく、他者の前でさえ。胸を張って、自分たちを守るために戦っているのだと、誇りに思っているとさえ言ってくれた。風当たりは強いだろうに。

『そんなことは、僕も香織も絶対に言わない』

「けど……」

今、光は孝二たちとは暮らしていない。共に過ごすことで、孝二たちが余計にマスコミなどに狙われるのではないかと思つたからだ。もしもそうなつたら、妊娠している香織に対して申し訳ない。

だから、光はセルフアと共に、VANに対するゲリラ戦を続けながら各地で寝泊りをしていた。倒したVANの人間からクレジットカードや資金などを奪い、それを使って生活している。

光が能力者であるということが知れ渡つた結果として、孝二の仕事上の立場が危うくなっている可能性は十分にある。この戦いに直接関わらない孝二たちに負担はかけられない。半ば強盗紛いではあつたが、それが最良の選択だと思つた。

『兄さんのこともあつたし、そんなに心は弱くない』

孝二は光の両親もまた能力者であつたことを知つていた。光が生まれる前から、両親である光一と涼子が戦つてきたのだと、教えて

くれた。そして、光と晃の安全のため、旅行と偽ってVANを潰しに海外へ行き、命を落とした。

『それに、無理しているのは光の方だろ？』

孝二の言葉に、光は何も言い返せなかった。

いつも、無理をしている。特殊部隊長を倒すために、寿命を削り、仲間を失いながら、ここまで生きてきた。色んなものを失くし、その度に様々な思いを乗り越えてきた。

先月には、光は一度本気で死にかけた。セルファがいなければ、目は覚めなかっただろう。

『心配はしなくていい。お前はお前の戦いに集中しろ』

優しい口調ではあったが、孝二は力強くそう告げた。

『香織に無理はさせない。いざとなったらできることはなんでもする。僕らでどうしようもなくなったら、その時は頼るさ』

一度、光の家の前に押し寄せた報道記者たちを蹴散らしてやろうと思ったこともある。だが、それをすれば光たちの印象もVANと変わらないものになりかねない。結局、修の力で記者たちを別の場所に飛ばして対処した。もちろん、修は姿を見せずに。

光は戦う力に特化しているが、セルファや修の力は応用が利く。特に、セルファの力は便利だと思える使い方が数多く存在する。もし、孝二たちが本当にどうしようもなくなったら、セルファの力を使えばいくらでも手は考えられるはずだ。

だが、その必要がない間は自分たちで解決すると、孝二は言っているのだ。光たちの戦いを邪魔したくはない、と。

「……解った」

『正直、たまには顔を出して欲しいとは思いますが、まずは目先のことを優先しなさい』

VANを倒して、全てが終わったら、家に帰れるだろうか。能力者に関わって混乱が続いていたら、暫くは帰れないかもしれない。ただ、セルファや修の力があれば直ぐに帰ることもできる。一時的に家に戻ることも簡単だ。

悲観的になる必要はどこにもない。

まずは、VANを叩くことが先決だ。VANは孝二たちに危害を加える必要性があるのだから、こちらを早く潰した方がいい。

「最後に、一つ聞いてもいい？」

「ん？ ああ、何だい？」

「……父さんと母さんは、どんな人だった？」

光は問う。

幼い頃に両親が死んでしまったとは言え、光が八歳になる直前だ。記憶に残っている部分はある。だからかもしれないが、今でも思い出すと少し胸の奥が疼く。多少なりとも憶えていることもあって、両親のことを孝二や深輝に聞いたことはなかった。気が引けたというのもある。口に出し辛かったというのも正直なところだ。

だから、孝二に両親のことを尋ねるのは、これが初めてだった。

「……光一兄さんは、結構自分勝手な人だったかな。自分でやると決めたことは、最後までやり通そうとする人だったよ」

柔らかい声が返ってきた。

「一人で背負い込むことも多かったかな。今の光と少しダブるところが多いね」

光は黙って孝二の言葉を聞いていた。

同じ思いで戦っていたのだろうか。きっと、全てが一致しているわけではないだろう。それでも、似たような感情はあったのかもしれない。

光一が戦っている姿を、この目で見たかった。

「涼子義姉さんは、優しい人だった。少し臆病なところもあったけど、こうと決めたら絶対に譲らない、芯の強い女性だったよ」

性格は光一に似ているかもしれない。孝二の話を聞いて、そう思った。

「でも、不思議と光一兄さんとぶつかることは無かった。きっと、それだけお互いのことを理解していたんだろうね」

確かに、光の記憶の中に残る二人に、夫婦喧嘩をしている姿はな

い。

今の光なら、何となく解る。

『やっぱり、電話じゃあ語り尽くせないな』

「今はそれぐらいでいいよ」

苦笑する孝二の声に、光はそう返した。

今はそれで十分だ。二人が強い人であったことさえ解ればいい。

「また、全てが終わったらじっくり聞かせてもらおうかな」

『ああ、待ってるよ』

光の言葉に、孝二はそう言ってくれた。

全てが終わった時、光が生きているかは解らない。既に、光は一度シェイドに殺されている。アグニアに辿り着くまでに、光が殺されてしまう可能性はある。アグニアと相打ちとなって命を落とすことだって十分にありうる未来だ。

孝二の知る全てを聞くためには生き残る必要がある。帰ってきて欲しいと、そう言っているのだと思った。

『……セルフアは、大切にするんだぞ』

電話を切ろうとした時、孝二がそつと呟いた。

孝二はVANからやってきたセルフアを快く直ぐに受け入れてくれた。光一と涼子の敵だったアグニアの娘であることを明かしても、光の傍にきた気持ちの本物なら構わないと、そう言った。今まで携帯電話を持っていなかったセルフアに、必要になるかもしれないと用意してくれたのも孝二だ。家族同様に扱って貰えたことで、セルフアは孝二たちをとても信頼している。家族の温かみを良く知らずに育ったセルフアには、嬉しかったに違いない。

光も嬉しかった。孝二たちのような家族がいたことと、セルフアが二人と打ち解けてくれたことが。

「……うん、大丈夫。それだけは、ね」

光は答えて、電話を切った。

聖一が情報収集のために外出しているため、部屋の中にいるのは光の他に、セルフア、有希、アルトリア・スコルジの三人だけだ。

修はマンションに戻り、以前知り合った、自衛隊の中にある能力者部隊、具現力特科と連絡を取っている。具現力特科は、有希の父親であり陸上自衛隊中部方面總監でもあった良一が設立した能力者の特殊部隊だ。日本の政府内で能力者に対処するために動いていた者たちの中核だったに違いない。

こちら情報収集ではあるが、それ以外にも目的はあった。家族との関係だ。

家族仲の悪い修の家では、もう家族の縁を切られているのかもしれない。修は既に、父親の姓を名乗ってはいない。光と出会った頃、小学校では、まだ父方の姓だった。本来なら、私立の名門中学に行くはずだった修は、光と同じ市立の中学へと入学していた。修は、両親の望む姿を裏切り、離反の道を選んだ。彼の両親が修に望んだものは、跡取りとしての能力だけだった。小学生の修には、両親からの期待が重過ぎたのだろう。同時に、修は両親にもっと別のものを望んでいた。だが、それは適わなかった。

光は親友と離れ離れにならなくて良かったとも思ったのも本音だが、その決断をすることがどれだけ険しい道を進むことになるのかは幼いながらに察していた。財閥の跡取りとなる道を選べば、将来は約束されたも同然だったのだから。

そんな決断ができた修だからこそ、光が具現力に覚醒した時も傍にいてくれたのかもしれない。ある意味では、修も光と同じ両親のいない境遇だったのだから。

修の名前が知れ渡ったことで、少なからず財閥にも影響は出ているだろう。恐らく、今日で修は家族との決着をつけるつもりなのだ。有希がこの場にいるのも、そのためだ。修の親の財閥がVANに狙われている可能性が無いとは言い切れない。マスコミなどが動くば、それに乗じてVANが動く場合も在り得る。有希を連れて動くことで、彼女の身を危険に晒す可能性があった。もし、有希と一時的にでも分断された場合、状況によっては彼女が無防備になる。

彼女も能力者であることが周囲に知れ渡っている。学校でも騒動

があつたらしく、暫く授業は休止になるだろう。交友関係がどうなったのか、光には推測しかできない。今となつては再び登校するのも難しいだろう。陸上自衛隊中部方面総監の娘ではあつたが、その父親は既に殺されている。母親も幼い頃に無くした有希には、身を守ってくれる者はいない。

今までは具現力特科が有希の護衛をしていたが、能力者であることがバレてしまつては、VANから守るだけでは駄目だ。非能力者も、ある意味では敵になる。いじめの対象となつたり、社会から阻害される確率が高い。そうなつた時、具現力特科の者たちでは本当の意味で彼女を守ることは難しい。

ただ、有希は今ではセルフアを友人と見ている。セルフアも有希と友達になれたと言つていた。修の愛人になると言つてついできたアルトリアとも、まだ若干ぎこちなさはあるが打ち解けているようだった。アルトリアは、本当に修と一緒にいらればいいらしい。

光は三人の雑談する姿を見て、気付かれないように小さく息を吐いた。

ほんの一瞬だったが、あの中にはもう一人、仲間がいた。光の思想に共感して着いてきてくれた少女は、もういない。そして、四ヶ月前に光を好きだと言つてくれた少女も、生きていればあの中にもいたのだろうか。

(何を今更……)

自嘲気味に口元を歪めて、光は軽く首を振つた。

「電話、終わったの?」

「ああ、うん」

電話が終わつたことに気付いたセルフアに、光は頷いた。ゆっくりと部屋の中央の方へと歩いて行く。

「どうだった?」

「大丈夫だから戦いに集中しろつて言われたよ」
セルフアの言葉に、光は苦笑して答えた。

今、この場で戦えるのは光だけだ。修が戻ってくるまでは、光が

彼女たちを守らなければならない。

「じゃあ、二人のためにも早く終わらせないといけないね」

そう言って微笑むセルフアに、光ははっとした。

「あ、そっか……そうだよな」

戦いが長引くことを前提に考えていた。確かに、どれだけこの戦いが続くのかは判らない。だが、光はこの戦いを終わらせるためにも戦っているのだ。孝二たちをどう守るか、二人の周囲は大丈夫なのか、心配し過ぎて失念していた。

孝二たちを守る最も手っ取り早い方法は、VANを壊滅させることなのだ。アグニアを倒し、VANを崩壊させれば孝二たちが能力者に狙われることはまずないだろう。VANと戦うという決意の中には、その考えも含まれていたはずだ。

周囲の変化や反応に気を取られすぎて、いつの間にか忘れていた。自分の居場所を取り戻すために、戦い始めた。実現するには、光が早く戦いを終わらせればよい。それだけのことだったはずだ。

「今日は、無理かな……」

光は小さく呟いた。

「たまには休んだ方がいいと思うけど」

セルフアが言った。

シエイドとの戦いの後、光は度々ROVのリーダーである刃の下を訪れている。ROVと共に戦うためではない。光自身が強くなるためだ。刃や翔と手合わせを行い、身体と共に戦闘技術を鍛えている。手っ取り早く強くなるために、自分より強い相手に稽古をつけて貰っているのだ。

セルフアは光が試合をしている間、その光景を眺めている。光の戦い方を見ていて客観的な意見を貰うことも重要だと思ったが、何よりセルフア自信が光と一緒にいることを望んだ。

修が不在の間は、光は三人と行動を共にしていなければならない。セルフアに任せても良いのだが、あまり彼女と別行動はしたくなかった。自分が守ると決めた相手だ。支え合うのだと約束した大切

な人だ。お互いに、離れたくないとも思っている。

「そう?」

確かに、強さを求めるあまり休憩はしていない。ほぼ毎日、ROVで特訓を受けている。

身体にもその影響は現れていた。ぱつと見での変化はほとんど無いが、身体中の筋肉が鍛えられている。具現力を解放していない時の運動神経がかなり向上しているのだ。肉体的にも、良く見ると引き締まってきたようにも思える。

具現力を発動しての運動や、限界を超えたエネルギーを扱うオーバー・ロードによる身体への反動かもしれない。同じ筋繊維でも、光と一般人では違っていそうだ。

もつとも、ROVでの訓練の際はオーバー・ロードを使っていない。それが寿命を縮める行為であると知っている者は少なく、恐らく光とセルフアグリだろう。情報収集に長けている聖一なら知っているかもしれないが、修や有希はまだ知らないはずだ。刃たちすらも知らないかもしれない。

オーバー・ロードは単純にエネルギーの扱う量を増やし、その破壊力を倍加させていくものだ。基本能力を鍛えておけばオーバー・ロードの際にも効果的に増幅効果を利用できる。むしろ、寿命を縮めてしまうオーバー・ロードは乱発できない。ここぞという時のために取っておかなければならない、奥の手だ。

「最近、少し疲れてるでしょう?」

心配そうに、セルフアグリが告げる。

否定はできなかった。さすが、いつも一緒にいるだけあって、良く見ている。ROVとの訓練の他に、VANに対するゲリラ戦も続けていた。

聖一が集めてくる情報で付近のVANの部隊の居場所を突き止め、襲撃をかける。同時に、VANの行動情報から次に敵の部隊がいるであろう場所へと移動していくのだ。次々に場所を変え、VANの部隊を潰していく。少しずつ、VANの戦力を削り、本部の防衛力

を減らすことが目的だ。十分に戦力が減ったところで、本部に乗り込んでアグニアを仕留める、というのが現在の作戦だった。

そのため、光は日によつては訓練の後にVANと戦ったり、逆に戦った後にROVへ赴いている。訓練をしない日は無かつたのだから、疲労も溜まる。

「……でも、早く強くならないと」

一刻も早く、アグニアに並ぶ実力を着けなければならない。孝二や香織のために早くVANを潰すためには、早急に強さを身に着けなければならぬのだ。

「疲れは溜めない方が、特訓の効率も上がるわ。それに……」

セルファの言葉に、光は俯いた。彼女も視線を落としている。

彼女の言いたいことは、解っていた。疲労を溜めすぎると、光の身体に影響が出る。今まで、オーバー・ロードによつて無理な精神力の消費をしてきたため、光の身体にも相当な負荷がかかっている。度を越した疲労により、その反動が大きく現れる可能性があつた。

セルファの見立てでは、激しい動悸や息切れ、頭痛や眩暈、吐き気、寒気、感覚の麻痺など、上げればきりがなが様々な症状が現れる可能性があると言う。複数の症状が合わさつて生じるかもしれない。そんな時にVANからの攻撃があれば、苦戦は必至だ。

「解つた、今日は休むよ」

光は顔を上げてそう言った。

万全の体調を維持して戦うことも大切だ。体調不良で動きが鈍つたりしては光だけでなくセルファも危険に晒すことになる。

幼少期は病弱だったため、体調には気を付けていたが、覚醒してからは体調不良を感じることもなかった。具現力による体組織の活性化だろうか。力を発動し、防護膜で身体を包んでいる間は、今までの光では不可能な運動もできた。その動きの負荷に耐えられるように、光の身体も急激に鍛えられている。

「少し、焦つてたかな」

苦笑して、光はベッドの上で仰向けに倒れた。

久しぶりに昼寝でもしようか、そんなことを考えた頃だった。
「ただいまー」

間抜けな声が部屋の中に響いた。修だ。
空間破壊でここまで来たようで、ドアが開く音はしない。ただいきなり修がその場に現れたことになるが、部屋の中の光たちは一切動じることはなかった。もう慣れてのことだし、修の力を使った移動も何度も行っている。

「おかえり修ちゃん」

有希が微笑み、修も笑みを返す。

「修くん！」

「うごわ！」

次の瞬間にはアルトリアが修に飛び付いて押し倒していた。有希が目丸くする。

「で、何でお前はキャベツをこんなに持ってきてるんだ？」

ベッドの縁に腰を下ろしたまま、光は倒れたままの修を見下ろした。手にはビニール袋を提げていたようだが、アルトリアに押し倒されたことで床に落ちた袋から中身が覗いている。

「ああ、間食にと思って」

首だけ起こして、修が答える。

「シユウって本当にキャベツ好きよねえ」

セルファが感心したような呆れているような、曖昧な溜め息をつく。

「キャベツは美味しいからな」

修はゆっくりとアルトリアを引き剥がして起き上がった。

「それで、用事は済んだのか？」

「まあ、な……」

光の問いに、修は少しだけ目を細めた。

「……どうなったの？」

不安げな有希に小さく微笑んで、修は口を開いた。

「財閥にも手が伸びてたよ、親子の縁なんて言ってる場合じゃなく

なっちまった」

懸念していたことではあった。

結城財閥はアメリカ軍の正式装備を供給している世界的な軍事複合企業「スコール」とも繋がりがあった。アルトリアはスコールの会長ということになっているが、取締役会はほとんどがVANのメンバーで構成されているため、会長とは名ばかりで経営権が一つもない。実質、VANの手足となっている。

そんなスコールと関係のあった結城財閥がVANに狙われているはずがない。今まで財閥から何の音沙汰も無かったが、それは修の両親が修を嫌っていたからだろう。いつ頃からVANの手が入り込んでいたのかは判らない。

ただ、修が両親の下を訪れた際に、VANの構成員が襲ってきたらしい。親の目の前で力を振るい、敵を仕留めたようだ。修はVANを叩き潰すために戦うことを告げ、両親と別れた。修の両親も、修を勘当すると言ったようだ。

跡取りとして機能しないばかりか、VANに敵対しているとすれば修との関係をそのままにはしておけない。そう判断したのだろう。たとえ、結城財閥がVANに友好的でないとしても、修のようなレジスタンスとの関わりがあれば存続が危うい。スコール経由で財閥にVANが潜り込んでいたことを、修の両親は知らなかった可能性もある。

ただ、世界的な一般認識として、能力者と関わらない、というものができつつある。情報として興味を持つ者は多いが、実際に接触することは避けていると言うべきか。VANを支援する組織は世界の敵となり、ROVなどのレジスタンスを持ち上げる者はVANの敵となる。VANの手が回った組織はVANと見て差し支えない。きつと、混乱に乗じてVANの所有する組織を逃げ出した一般人もいるに違いない。

「そうか……」

光は相槌だけ打った。

家族の間柄は、修が最も複雑だろう。光にどうこう言えるだけの知識はない。愚痴を聞いたり、相談相手として意見を述べるぐらいのことしかできなかった。最後は全て修の判断に委ねられる。元々、どうするかは修自身が決めている節があった。光の言葉は修の気持ちの後押しするぐらいだったに違いない。

「修ちゃんは、それでいいの？」

有希の言葉に、修は静かに頷いた。

「いいんだ。どうせ高校を卒業したら縁は切られてただろうし、それが早まっただけさ」

今までは、マンションの家賃と最低限の生活費が仕送りされていた。時折、両親や財閥の関係者が修の下を訪れることもあったが、そう頻繁なことではない。ほとんど放置に近い状態だった。親子の情など、修の両親にはなかった。

「あ、俺の荷物は光ん家に預けさせてもらったわ」

「あいよ」

思い出したように言う修に、光は生返事で了承した。

修が家族から勘当されたとなれば、仕送りはストップする。マンションの家賃も止まるだろう。そうなることを見越して、修はあらかじめ光に相談を持ちかけていた。

光は一時的に自分の家に修の持ち物を置くことを了解していた。戦うことに専念している今、寝泊りはホテルでもできる。困るのは家においてある私物だ。その私物を、光が家で一時的に預かることになっていった。もちろん、孝二や香織にも事情は話してある。全てが終わるまでは外泊が基本になるだろうから、回収するのは全てが終わってからだろう。戦いが終わらなければ、修も安心して家を探すことはできないだろうから。

修はさらっと軽く言っているが、実際はどれだけの葛藤があったのか判らない。修にしか解らない苦労はあっただろう。いや、だからこそ何でも無かったかのように振る舞っているのかもしれない。修も色々と溜め込むタイプだ。

光は小さく息をついて窓から外の景色を眺めた。光たちがいるのは七階辺りだが、ホテル自体はその倍近くの階層がある。周りの建物も決して小さくはなく、ホテルが飛び抜けていたり、逆に埋もれていたりということもない。

何となく、光は向かいの建物に視線を向ける。やや広めの道路を挟んだ向かいの建物には看板が見えた。

だが、その文字はぼやけていた。

英語で書かれているから、疲れているから、というわけではない。視力が落ちているのだ。ゲームのやり過ぎや本の読み過ぎということはない。オーバー・ロードによる寿命の大量消費の影響だろう。

セルフアと出会った頃から、視力の低下は感じられるようになっていた。もちろん、具現力を発動すれば視力が落ちる前と変わることなくものを見ることができる。視力が低下する前に防護膜で強化された視力と、今の視力が低下している状態で防護膜で強化した視力とに差はない。

ただ、防護膜を消している時の視力だけが低下している。

(身体に現れ始めているのか……?)

後どれだけの敵を倒したら、アグニアの下まで行けるだろうか。

その計算をするためにも、聖一は敵戦力や組織力の情報を掻き集めている。参謀は修だ。

信頼はしているが、それでも不安になる部分はある。

「ん？」

不意に、ドアをノックする音が聞こえた。

「先輩、じゃあないよな？」

光は不審げな表情を部屋の仲間たちに向けた。

聖一ならば携帯電話に連絡を入れてから戻ってくるはずだ。それに、まだ戻って来るには早い時間でもある。

光は常にセルフアと、有希やアルトリアは修と行動を共にしているため、空間やその間に存在する物体に関係なく移動ができる。だが、聖一の力は空間を捻じ曲げるだけだ。間にある物体を透過する

ことはできず、部屋に入るためにはドアを開ける必要があった。

もし聖一だとしても、光たちにそれを告げるはずだ。

光は修と視線を交わし、力を解放した。気配を探るが、やはり聖一のものとは違う。

「相手は二人だ。VANではなさそうだけど……」

外に聞こえぬよう、光は小声で伝えた。

VANの人間なら回りくどい方法を取るよりも力を行使して奇襲を仕掛けてくるはずだ。VANと言っても、様々な人間がいるだろうから、回りくどい手を取る者もいるかもしれない。

「誰？」

ドアを締めたまま、セルフアが声を投げた。相手が日本人ではない可能性を考慮してか、力を発動している。

「……開けてくれないか。話がしたい」

男の声が聞こえた。英語だったが、セルフアの力が瞬時に翻訳している。

「用事？」

「私はジャーナリストだから、敵ではないわ。味方でもないけれど、眉根を寄せる修の言葉に、小さく笑う女性の声が返ってきた。

「どうする？」

「会ってみるか……？ 何か情報が得られるかもしれない」

光の問いに、修は顎に手を当てて答えた。

VANに対する有益な情報を持っている可能性もある。取材と言っているが、そうやって油断させようと考えている可能性もある。どこまで信用すべきだろうか。

「じゃあ、開けるぞ？」

光は部屋の中の全員に確認の問いを投げて、ロックを外してドアを開けた。

入ってきたのは、大柄な中年男性と女性の二人組みだった。男の方は堅物そうな表情で部屋の中にいる者たちを一通り見回していた。男の服装はスーツだったが、女性の方は随分とラフな服装だ。穴の

空いたジーンズに、黒いタンクトップを身に着け、その上に青いワイシャツを着込んでいる。

「お前が、カソウ・ヒカルか……」

男が視線を細めて光を見下ろす。値踏みするかのような視線だったが、明らかに良い印象には映っていないと判った。

「あんたらは？」

自分たちのことを相手は知っている。だからこそ話をしたいと言つてやってきたのだろうし、それ以前に光たちの名前と顔は世界的に流れている。

光たちを知っているのなら、相手の自己紹介さえ聞けばいいだろう。まずは、相手が誰なのかを見極めなければならぬ。

「私はヴィクセン・シークアイ。フリーのジャーナリスト」

そう言つて、女性は光を見つめる。男と同じように値踏みするような視線だったが、彼よりは好意的に映った。彼女の仕草が丸い印象だったからだろうか。

「ヴィクセン……ねえ」

修が呟いた。

ヴィクセンと言えば、英語で雌狐を意味する言葉だ。あまり好意的な使われ方はしない単語でもある。大方、偽名か何かだろう。

「私はハウンド・ディスタンス。アメリカ陸軍中佐だ」

男の言葉に、光と修は驚いて顔を見合わせた。

「ジャーナリストに陸軍中佐？」

光は眉根を寄せる。

少しおかしいな組み合わせだ。中佐と言えば階級的にもそう低いものではない。むしろ高い部類に入るはずだ。だが、その中佐が一人で光たちの下へ会いに来たというのも少し奇妙な話に思えた。しかも、同行者はジャーナリストだと言つた。

「私は軍に情報提供する代わりに、同行して様子を見させてもらうことになつてるの。要は、情報収集、取材を交換条件にしたって訳」
ヴィクセンが一気に告げた。

浮かんだであろう疑問に対し、自分の関わっている部分だけは全て明かした形だ。ジャーナリストとしての腕を買われたのか、自ら軍に売り込んだのかは判らない。ただ、光たち能力者に関しての取材をしているというのが彼女の主張と見て間違いない。

「今、世界中に報道されているあなたたちの顔写真を取ったのも私。ジャーナリストだけどカメラマンでもあるの」

少し自慢げにヴィクセンは言ったが、光たちからすればいい迷惑だ。

「俺たちには迷惑だったけどな」

「私も仕事だから勘弁してね。この仕事も大変なんだから」

溜め息をつく光に、ヴィクセンは苦笑して返した。

「それで、陸軍中佐は何でここに？」

修の言葉に、ハウンドはやや不満そうに口を開いた。

「お前たちの力を、借りたい」

「具体的にはどういう意味で？」

「すぐさま修は言葉を返している。」

説明不足なのは明らかだ。もちろん、説明はしてくれるのだろうが、アドバンテージが自分たちにあることを認識させるために修は割り込んだのだろう。

「言葉通りだ。アメリカ軍、いや、国連軍がVANと戦う際に戦力として加わってもらいたい」

「断る」

誰よりも早く、光はそう告げていた。

第二章

第二章 「求めるもの」

光の素早い返答に、二人は驚いた様子だった。何を言われたのか解らなかつたのかもしれない。

「お前たちはその力がどれだけ危険なものか解っているのか？」

先に口を開いたのはハウンドだった。苛立ったような表情で、ハウンドが言う。多少語気が強いのは気のせいではないだろう。

「なら、あんたらは俺たちがどれだけの覚悟で戦ってるのか判ってるのか？」

「またも光は即答していた。」

眉根を寄せるハウンドを見て、光は溜め息をついた。

「あんたらは、いつもそれだな」

「何だと……？」

光の言葉に、ハウンドは不可解だとも言いたげに視線を叩き付けてくる。

「俺たちが世界のためだとか、ヒーロー気取りで戦ってるガキだとも思ってたのか……？」

怒気を孕んだ視線で睨みつける光を見て、ハウンドは一瞬だったのが気圧されていた。

「俺たちのところに来たのはお前らだけじゃない」

「追い討ちをかけるように、修が言い放つ。」

この一ヶ月の間、光たちは世界から放置されていたわけではない。日本はVANに反抗する勢力が最も強い場所だと聞く。VAN蜂起の際の襲撃も、日本での戦闘は他国に比べてもトップクラスだった。それに、光や修は日本人だ。関係者は日本にいる。故に、日本政府や日本のマスコミなどが光たちに接触してくるのも当然の流れと言える。

「皆、俺たちを食い物にして自分の命を守ることしか考えてない」
日本政府の議員がそうだった。

金で光たちを雇い、VANから身を守る盾にしようとしている者がいたのだ。もちろん、いくら積まれても光は首を縦には振らなかった。光たちの動向、これからどうするつもりなのかを確認し、自分たちの手駒にしようとする者もいた。VANに感化されているのか、自分たちに攻撃の矛先が向く可能性を考えているのか、光たちに地位や名声、富をやるから身を退かないかという者もいた。

マスコミは自分たちの都合の良いように、世間に対して都合が良
いように、湾曲させた情報を流している。まともに取材を受けても、
光たちの伝えたいことが流されるとは限らない。

政治家も、マスコミも、光には信用できる対象ではなかった。

「我々は違う」

ハウンドは言い切った。

「どう違う？」

「世界を脅かす敵を倒すのが目的だ。VANを叩くのが目的なら、
一致しているはずだ」

光の問いに、ハウンドが答える。

確かに、VANを叩くという目的だけなら世界の目的と一致する。
だが、それはROVとて同じことだ。

「俺に世界の味方になれって言うのか？」

「そうだ。その方がお前たちにとっても都合が良いはずだ」

ハウンドの言わんとしていることは判った。

国連の側について、VANと戦うことで光は世界的に味方と認識
されることになる。国連、つまり世界の側からはバックアップが行
われ、寝る場所や食事なども用意されるかもしれない。同時に、光
たちに対する認識が変わる。味方という認識になることで、能力者
という一般人からは避けられる対象であっても、VANなどの危険
人物とは違う視線になるはずだ。

戦いが終われば、英雄などと持てはやされるのだろう。

寝る場所や食事などは少々魅力的だが、軍から監視を受けるのはまず間違いない。戦闘行動に関して制限を与えられたり、軍の指示や作戦の下でしか動けなくなる可能性だってある。

「結果としてVANを潰すのが目的でも、目指すものは違う」
光は言った。

単純に味方となる人員が増えることは悪くない。いつも人数不足が光たちの戦いにはついて回っていたのだ。数がいれば戦略の幅も広がる。効率化だって図れるかもしれない。

「ま、能力者以外が増えても役には立たないかもな」
修が呟く。

「我々の力を舐めているのか？」
ハウンドの表情が不機嫌そうなもの変わる。

「銃火器が全く効かないって訳じゃあないけど、効果的とは言えないしな。能力者が使うならともかく、分が悪い」

容赦なく修は言い放った。

急所に撃ち込めさえすれば銃火器も有効だ。だが、人間の反応速度を超えた身体能力を発揮する能力者相手に効果的かと言えばそうではない。常人ではまず捉えられない銃撃でも、認識できる能力者は少なくはないだろう。具現力にもよるだろうが、大抵は回避も防御もできるはずだ。

たった一人を仕留めるために、どれだけの戦力が必要になるのだろうか。

それを考えれば、軍と共に戦うことに魅力はあまり感じられない。足手纏いな仲間が増えるだけかもしれないのだ。部隊長クラスの手相手をする際に回りに気を遣うことは難しい。味方を巻き込みかかない攻撃を放つ時だってあるだろう。そんな時に、能力者ではない軍人はただ的であり邪魔な存在にしかならないのではないだろうか。

手数は増えるが、弾薬の費用も馬鹿にならない。始めから効果が薄いなら、銃器を使うのも能力者にした方がいいかもしれない。も

つとも、銃器がどれだけ有用かどうかは相手にもよるだろう。単体での攻撃能力がかなり高い部類に入る光には全く要らないものかもしれない。

「舐めてるのはあんたの方だろ」

光の言葉に、ハウンドの手が懐へと伸びた。

ほんの一瞬の間に、光は力を解放させている。懐から銃を取り出したハウンドの手首を、光の手が掴んでいた。

「……銃で脅したって無駄だ」

その言葉に、ハウンドは忌々しいとでも言いたげな表情で光を睨みつける。

「俺たちは世界を守るために戦っているんだ。それを侮辱するつもりか？」

「否定なんてしない。俺たちには必要ないって言っているんだ」

ハウンドの言葉を、光はそう切り替えした。

軍の有り方を否定するとまでは言わない。相手が能力者の集団でさえなければ、軍事力は有効だっただろう。だが、現実には能力者と戦わなければならない。

世界中の国々が一致団結を始めているのは良い傾向かもしれない。だが、それでVANを倒せるかと言えば難しいところだ。いがみ合う国々が、これで手を取り合うような関係になれたとしたら、VANの存在も悪い部分だけではないかもしれない。

「能力者とまともに戦えるのは能力者だけって言うのは、今に始まったことではないわね」

今まで黙り込んでいたヴィクセンが呟いた。

光とハウンドの会話記録を取っていたらしく、メモ帳とペンを持っている。

「あんたは、能力者の力を知らないんだ」

言って、光は掴んでいた手を放した。同時に、横薙ぎに払った腕でハウンドの持っていた拳銃の銃身を削り取る。

いとも簡単に破壊された銃を見て、ハウンドが固まった。グリッ

ブだけになった銃を見つめている。その頬を、汗が一筋伝っていた。
「それだけの力がありながら、何故個人で動く……」
「だからこそ、でしょう？」

ハウンドの言葉に答えたのは、ヴィクセンだった。

どこかの組織に属したとすれば、光たちが個人の思惑で動くことは難しくなる。組織全体の利益や目的に縛られることになる。単体で凄まじい力を発揮できるからこそ、個人の思惑で動きたいのだ。

「何故、手を取り合おうとしない！」

「……拒絶されるのはいつも俺たちの方だ」

叫ぶようなハウンドの言葉に、光は静かに告げた。

どれだけ光が世界の味方として戦おうとも、その力が必要でなくなった時、捨てられる。一般人から見れば、光たちとVANの能力者に違いはない。ただ、凄まじいまでの力を振るう危険な人物としか映らない。一部の人に理解してもらえたとしても、多数は光たちを恐れるだろう。

VANとの戦いで軍隊の存在が押されているうちは光たちの力は欲しいところだ。だが、軍が優勢となれば光たちの存在は不穏分子になりかねない。同じ能力者なのだ。いつ裏切られるか判らないというのが本音に違いない。

「だったら、お前たちが戦う理由は何だ！」

ハウンドが叫ぶ。

「俺たちは、平穏な日常を取り戻すために戦っている。俺たちの居場所、家族、大切なものを守るために、戦ってるんだ」

光は言った。

「そんな、ちつぽけなもののために……」

「小さいと思うなら、あんたに俺たちは説得できない」

ハウンドの言葉を、光は一蹴した。

「我々は世界を守ろうとしているんだぞ」

「根本的には同じだろうが。俺たちをあんたらと一緒にするな」

光は光にとっての世界を守るために戦っている。

「そんな大義、俺たちには必要ねえな」
修が言った。

世界が変わっても、光たちは存在できる。光の家族もいる。もしも、世界がVANに敗れたとしても、光たちが生きているのならそれは些細なことだ。世界のために戦っていれば、光たちの戦いもそこまでになる。だが、光は光の望む未来を掴むために戦っている。そこに世界全体の環境は関係ない。国連が壊滅していても、生きていられるなら、戦いの無い日常を得られるのなら、光は戦う。

個人だからこそ、軍などの決めたルールに則って戦闘行動が封印されることはない。

「俺たちはまだ子供だ。だからこそ、笑って過ごしたいんだよ！」
光はハウンドの胸倉を掴んでいた。

まだ、光は社会人ではなかった。最初は単なる高校生に過ぎなかったのだ。遊んでいた、気楽な学生生活をしていたい、そんな思いはまだある。

「俺たちには、小さな環境が世界そのものだったんだ」

外国がどうのとか、国の情勢だとかは雲の上の話でしかなかった。高校生だった光たちにとっては手の届かない場所の話だった。自分の住む場所、家族、友達、クラスメイト、学校、日常、進路、そんなものが光にとっての世界だったのだ。それを守るために、そこに戻るために戦い始めた。

「ヒカルが、どれだけ悩んで、傷付いて、戦ってきたのか、知らないでしょう？」

セルファの言葉に、ハウンドは目を見開いた。

「失くしたのも少なくないし、そうなることも考えて戦ってきてる」

セルファの表情は、暗いものだった。

「私たちの覚悟は揺るがない」

それでも、セルファはきっぱりと言いつつ放った。

光たちの理念をちっぽけだと言いつつ切るような組織につくなんて考

えられない。VANの壊滅を目的に戦うだけならば、光はとつくにROVのメンバーとして活動している。ROVに属していないのは、目指すものが違うからだ。協力することはあっても、同一の存在ではない。

「俺たちの戦いを利用するのは構わない。けど、俺たちの邪魔をするなら、あんたらも敵だ」

戦闘結果を他の誰かが利用しても光たちは関知しない。光たちの戦いを軍や世界が利用して動いても、光たちの邪魔にさえならなければ文句を言うつもりはなかった。ただ、光たちにとっても邪魔になるのであれば、容赦なく攻撃する。

「そういう物言いは敵を増やすだけだぞ」

少し冷静になったのか、ハウンドは客観的な言葉を返してきた。

確かに、光たちの言い方はVANだけでなく世界をも敵に回しかねない意見だ。邪魔をするなら敵だ、と言えばどんなものでも敵に変わるということなのだから。

「目の前で仲の良かった人が死んだこともある。知り合いが敵で、殺したこともある」

光の言葉に、ハウンドが視線を細めた。

「他人を巻き込むのは御免だ」

たとえ、光たちが気を遣わなくてもいいと言われたとしても、光が戦っている戦場で自分たち以外の誰かが死ぬようなことがあればどうしたって責任を感じてしまう。光たちが上手く立ち回れば、被害を出さずに済んだかもしれない。そう考えてしまっただろう。自分たちの環境を守るためには、無関係な人を巻き込むことも避けなければならぬ。たとえ、それが世界を守るために戦うという軍隊だったとしても。

「俺たちが戦うのは、俺たちのためなんだ」

光はハウンドの目を見て告げた。

これまで光たちがどんな思いで戦って来たのかを考えようとせよ、上辺だけ媚びへつらうように言い寄ってくる政治家が、マスコ

ミが、大人が、大嫌いだった。

ハウンドは少し違うようにも思えた。それでも、協力しようとは思わない。ハウンド個人は光が嫌う人間と違っていたとしても、上司や、周りの人間たちもそうとは限らない。面倒なことが増えるだけだ。

「まあ、軍も信用できないしな」

修の言葉を、ハウンドは否定しなかった。いや、できなかったと言わなければならない。

恐らく、軍の関係者の中にVANのスパイがいることを知っているのだ。だからこそ、中佐という階級であるにも関わらずたった一人で光たちに接触してきた。部下からハウンドまでの伝達経路にスパイがいる可能性を考えてのことだろう。階級に見合う権限を持っているハウンドならば融通も利くだろうから。

軍にスパイがいるとなれば、光が属した際に行動が筒抜けになってしまう。やはり、光たちは個人で動いていた方がいい。

「それに、あなた、能力者だろ？」

ヴィクセンに対して向けられた光の言葉に、ハウンドは目を見開いてヴィクセンに視線を向けた。

「その根拠は？」

動じた様子もなく問いを返すヴィクセンに、光は確信していた。

「あなたの態度かな。冷静過ぎる」

今まで、光に接触を凶つてきた者たちとは態度が違う。

マスコミであれば矢継ぎ早に質問を投げ付けてくるし、政治家であればどこか怯えているような、焦っているような、中途半端に本心が見え隠れする。冷静な者もいたが、実際に力を見せ付けた途端に仮面が剥かれる。

軍人であるハウンドですら、光が銃を容易く破壊して見せた時には衝撃を受けていた。確かに動揺していたのだ。

だが、ヴィクセンは違う。光たちの写真を撮影してきたと言っていたが、それ自体が不自然でもある。

「この一ヶ月、あんたと同じ気配を感じることがあった」

光には能力者の放つ力場を察知する力がある。それは、光が持つ力場破壊能力に由来するものだ。他者の発した力場を掻き消すという特性から、光は相手の力場を感覚として捉えることができる。力場が力の対象となるからだろう。

本質的には力場と同じ防護膜も光は捉えることが可能だ。敵が隠れていても、場所や動きを知ることができる。そして、使う力によって気配は異なる。

もしかしたら別人かもしれないが、その確率は極めて低い。

「さすが、鋭いな、光」

答えたのはヴィクセンではなく、ドアの方から聞こえた声だった。
「先輩……！」

光は目を丸くした。

いつの間に戻ってきたのか、聖一が部屋に入ってきた。連絡を入れずに聖一が戻ってきたとは珍しい。もっとも、光たちが気付かなかっただけかもしれない。ヴィクセンやハウンドとの会話に意識が向いていたのは事実だ。

「彼女は俺と同じ情報屋だ」

聖一は世界各地に情報網を張っている。それは、聖一と同じように情報収集を得意としながらVANの動きを快く思わない者たちのようだ。つまり、そう言った者たちの繋がりを作り、ネットワークを形成しているのである。

VANの中でスパイ活動を行っている者や、レジスタンス側に紛れ込んでいる者もいるようだ。聖一は彼らと定期的に接触することで常に最新の情報を得ている。敵の情報も、味方の情報も。

光が覚醒する前から情報屋として中立を位置していたことを考えると、聖一の情報網はかなり大きいものなのかもしれない。

「こいつが、能力者だと……？」

聖一の言葉に、ハウンドが噛み付いた。

どうやら、ヴィクセンが能力者であることはハウンドも知らなか

つたらしい。聖一はベッドに腰を下ろして語り始めた。

「ヴィクセンは俺の情報源の一つでもある。立場は中立を貫き続けるつもりらしいがな」

ジャーナリストとして様々な場所に赴き情報を集め、その情報を聖一が受け取ることもあつたようだ。確かに、聖一だけでは情報収集も大変だろう。情報を集めるには人手が欲しいと思うのは当然だ。その、聖一の情報網の一つがヴィクセンだったらしい。

VANの手が入っていると思われる組織や施設に、取材するという名目で潜入していたのだろう。内情視察や情報の引き出しなどを行っていたに違いない。

「軍との接触は早めに済ませておいた方がいいと思つてな。彼女に頼んだ」

その聖一の言葉に、光たちは顔を見合わせた。ハウンドも理解できないといった様子でヴィクセンに視線を向けている。

「これからの戦い、無闇に介入されても困るだろう」

聖一の言葉に、光は納得した。

確かに、光とVANが戦っている場所に軍が介入してくるのは困る。軍から見れば、光たちやROVのようなレジスタンスはVANのように明確な敵ではないという認識しかない。この一ヶ月の間にVANもろとも攻撃される可能性もあつたのだ。聖一が情報操作をしてくれていたのかもしれない。

「私が来たのは、情報提供の代価が取材だから」

そう言つて、ヴィクセンは自分が能力者であることを認めた。

聖一との提携も、いずれは光たちを取材させるという条件を付けていたらしい。

「私は真実が知りたいだけだからね」

言いながら、ヴィクセンは上着の胸ポケットから煙草を一本取り出した。

「あつと、もしかして禁煙？」

顔を顰めた光を見て、ヴィクセンは火を点ける前に手を止めた。

「そういうわけじゃあないけど、あまり吸って欲しくはないかな」
今では完治しているが、幼い頃に喘息を患っていた光は煙草が苦手だ。そうでなくとも、煙草を傍で吸われるのはあまり好きではない。それに、この場には光だけでなくセルフアや有希もいる。彼女らに煙草は毒だろう。

ヴィクセンは煙草を口に啜るだけに留めたらしかった。

彼女がどこまで信用できるのかは判らない。ただ、軍人と一緒にいるところや、そのハウンドがヴィクセンの力を知らなかったことを考えると、中立と見ても良さそうだと思えた。敵なら光の油断を見逃すはずはない。最初にジャーナリストだと言って困惑させた夕イミングで攻撃してきてもおかしくはないからだ。

「この力をどう使っていくのか、まだ世界は答えを出していない」
その答えを見たい。ヴィクセンはそう言った。

世界の見方が違うんだ、と率直に思った。

光たちは、VANを単なる能力者の集まりとしか見ていない。光たちが見る世界は、VANを受け入れていない者たちで構成されている。一般人、国連、そんな言葉で括れる、大多数の人間を見ている。能力者や、今の争いは世界の中で起きている出来事に過ぎない。だが、ヴィクセンは全く別の見方をしていた。能力者が表舞台にその存在を晒し始めたことで、世界がそれを認識した。刃は人類全てが能力者になる可能性を持っていると語ったことがある。ならば、いくら能力者を排除したところで能力者という存在は無くならない。永遠に戦いが続くだけだ。

恐らく、ヴィクセンはいずれ能力者の存在が認められると思っている。いや、能力者の存在は既に認知されているのだ。彼女からすれば、具現力は世界に認められているに違いない。

この力を人類がどう使っていくのか、その最終判断を見届けたいというのがヴィクセンの願いということなのだろうか。自分自身は極力関わらず、傍観者の側に徹して。

「あなたたちの話も、忠実に記事にするつもりよ。あなたたちが伝

えたいことが伝わるような記事にね」

啜えた煙草を揺らして、ヴィクセンは笑ってみせた。

「……くっ、結局、踊らされたのは俺たちか」

視線を逸らし、ハウンドが齒噛みする。どこに怒りをぶつけていいのか判らない、悔しげに表情を歪めている。

「あんたたちが友好的でも、俺たちは軍とは組まない」

光の言葉に、ハウンドが目を向ける。

「まあ、スコールも結城財閥もVANが入り込んでたかな。個人で戦うしか、選択肢がないってのも事実だ」

修が光の言葉を引き継いだ。

世界的な軍需企業スコールはVANの言いなりだ。取締役会の人間が全てVANの能力者であることははっきりしている。ならば、スコールと関わりのある組織と手を組むことは危険を伴う。スコールとも繋がりがあつた結城財閥にもVANの手が回っていた。

「スコール……！ だとすると、やはり彼女は……！」

ハウンドがアルトリアに目を向ける。アルトリアはこれまでの話を聞いていたのかいないのか、首を傾げて不思議そうな表情をするばかりだ。

アルトリア・スコルジーであることに気付いたのだろう。ハウンドなら、アルトリアの存在を知っていてもおかしくはない。スコール以外にも、軍事関係者でVANと繋がっている者はいるかもしれない。ただ、そこから先は光たちには関係のない話だ。

「知っていたのか、お前は……？」

ハウンドがヴィクセンを睨み付けた。それは確認とも呼べる問いだった。ヴィクセンが聖一と同じ情報屋であるなら、知っていて当然だとも思える。

「だとしたら？」

どこまで世界がVANの影響を受けているのか、アメリカ軍は察知していないのだろう。ヴィクセンが軍に接触した時も、きっと何も言わずに光たちの下へ誘導するように動いただけなのだ。

「フェアじゃない……。お前は傍観者じゃあないのか？」

ハウンドがヴィクセンに言葉を叩き付ける。

傍観者に徹するためには、関わってはならない。そう言いたいのだ。ヴィクセンが光たちに接触し、事情や経緯などを聞き出すだけならともかく、聖一の情報網の一つとして機能するのはその意味には反している。聖一に情報を流したりすることで、ヴィクセンはこの戦いに関わっているとも言えるのだから。

「見ているだけじゃあ、真実には触れないから」

ヴィクセンは薄い笑みを浮かべてハウンドを見返した。どこか達観したような、大人っぽい笑みだった。

世界の裏で暗躍していたVANと、レジスタンスの真実を知るためには、二つの組織に触れなければならない。だから、ヴィクセンは自らも関わる道を選んだ。関わることで流れは変わるかもしれない。それでも、ヴィクセンはこの戦いの中にある思いを知りたかったのだ。

「この戦いは、あくまで能力者同士の戦いだと思うから」

現時点で能力者と互角に戦える兵器は存在しないと云っても過言ではない。

国連は戦うことを決め、世界はそれに同調した。だが、VANが優勢なのは誰が見ても明らかだ。世界各国で能力者の研究が行われているが、対抗するためのチームを組むためにはまだ時間がかかるだろう。それこそ、能力者並の力を操れるような兵器が開発されない限り。

しかし、現時点ではそんな兵器は望めない。新兵器はあっても、対兵器用の兵器とでも言うべきか、そんな代物ばかりだ。まだまだ未知の力とも呼べる具現力に対抗するための兵器ではない。自然法則を書き換えたり、高エネルギーを操る能力者に対抗するためには、研究が足りないのだ。

これこそ、フェアではない。

VANが世界を牛耳り、独立を勝ち取るのが先か、世界が能力者

に対抗し得る兵器を開発するのが先か、そんなところだろう。

「そうだな、VANはまだ本腰を入れて戦っちゃあいない」

「なんだと……！」

聖一の言葉に、ハウンドが喰い付く。

「あいつらにとっては、まだ根回しが終わった段階だろう。これから、VANの攻撃は今よりももっと激しくなるぞ」

冷静な聖一の推察にハウンドは黙り込んだ。

スコールや結城財閥を始めとし、世界各地に食い込んだVANは、これから自分たちの居場所を確保するために動き出す。抑圧され、迫害されてきた能力者たちが自分たちの存在をアピールしながら生きて行ける場所を。そのための準備段階が終わったに過ぎない。舞台上に現れる宣言の瞬間は、まだその過程に過ぎなかったのだ。

世界中にVANの存在を認識させ、その上で各地域の反応を見る。同時に、手駒にした組織内の反抗勢力を炙り出し、組織の実権を確固たるものにする。そこまででようやく準備が終了するのだ。そこから、世界に能力者たちの楽園を創る。

まだまだ戦いはこれから、なのだ。

「それに、この戦いを終わらせるのは、軍じゃないと思うのよ」
そう言って、ヴィクセンは光たちを見回した。

「私は、あなたたちがこの戦いを終わらせるんじゃないかと思っているわ」

「こんな子供たちが、世界を変えると言うのか……」

ヴィクセンの言葉に、ハウンドが渋い表情をする。

ハウンドは実際の戦場を見てはいないのだろう。VANもROVも、能力者たちは比較的若い世代が多い。

「能力者は、自我が強くて現れてくる時期に覚醒するのはほとんどだから」

静かに、セルフアが呟いた。

精神と密接に結び付いている具現力は、精神面、つまり自我が現れ始める頃に覚醒しやすいらしい。つまり、光たちの年代が多いと

いうことだ。十代で覚醒するのが基本なのだろう。

例外はあるだろうが、年齢を重ねるにつれ、精神や自我が安定して行くにつれて覚醒し難くなっているのかもしれない。もちろん、幼過ぎても駄目だろうが。

「話は済んだな？」

聖一が口を開いた。ヴィクセンとハウンドに向けられた言葉だ。

「私は十分、あなたたちの真意に触れられたと思うわ」

肯定するヴィクセンに対し、ハウンドは険しい表情で光たちを見つめている。だが、何も言い出せないところを見るとハウンドもこれ以上の交渉は不可能だと感じているのだろう。

「光、これからのことだが、気になる情報を手に入れた」

話が一段落したことを確認し、聖一はそう切り出した。急に戻って来たのも何か情報入手したからなのだろう。

「晃が、この付近にきているらしい」

「兄貴が……？」

聖一の言葉に、光は目を丸くした。

晃から光に対しての連絡はない。レジスタンス側に寝返ったという情報があれば、まず聖一が接触を試みているはずだ。となれば、現状で晃は敵ということになる。

「第一特機の一員、ということになっているらしいな」

特機、とは特殊機動部隊の略だ。ナンバリングが一の部隊を、光は知っている。

（ダスクの部隊……！）

ダスク・グラヴェイト。VANの中でも光に友好的な意思を見せてくれた人物が率いる部隊だった。

彼の部隊に、晃が属している。

「特訓をしていたお前なら判っていると思うが、近くにはROVもいる」

恐らくはそのROVへの襲撃だろう。聖一はそう推測しているのだ。確かに、情報を聞けば光もまずそれを考える。

(ダスクと戦うのか……？ それとも、兄貴と……？)

光は齒噛みした。

ダスクも晃も、戦うとなれば光が決着をつけたい。

とは言え、同時に二人を相手にするのは無理だろう。少なくとも、晃は光とほぼ互角の力を持っているのだ。訓練を積んでいるのは晃も同じだろう。光がROVで特訓していたように、晃はVANで訓練をしていたはずだ。

戦うとなれば、どちらか一方の相手しかできない。

(もし、そうなら、俺は……)

光はどちらと戦うべきだろうか。

「どうする？」

修が問う。

迷っていても始まらない。答えは出ていた。

悩んでいては二人と会うチャンスを逃してしまうだけだ。どちらと戦うにせよ、まずは動くべきだ。実際に接触するまでに結論を出せばいい。もちろん、その場その場の状況を見て判断するのも手だ。「行こう。兄貴の答えを、確かめる」

光の言葉に、仲間たち全員が頷いた。

晃が出した結論を、光は知らなければならぬ。ただ一人の兄弟として。同時に、敵になるというのなら再び拳を交えなければならぬだろう。今度は、修は助けしてくれない。決着がつくとしたら、光と晃のどちらかが死ぬ時だ。

今まで、晃が戦場に出たという情報を聖一は得ていない。もしかしたら、この戦いが晃の初陣である可能性もある。ダスクがいることを考えれば、一筋縄ではいかないだろう。光たちで人数は足りるだろうか。

情報を持ってきた聖一を先頭に、光、セルフア、修と続く。部屋を出る直前、修は入り口付近のホルダーに掛かっていた鍵を取った。「ということで、支払いよろしく」

言い放ち、修は部屋のキーをハウンドに投げた。

「ちやつかりしてるよ」

修を見て、光はセルフアと顔を見合わせて苦笑した。

だが、直ぐに表情を変えて聖一の後を追う。気を抜いていられるのはここまでだ。これから、光たちは戦いに行くのだから。

真剣に意思を固めておかなければならない。晁を殺す覚悟を。

「……全く、勝手な奴らだ」

取り残されたのは、大人たちだった。

「ライト・プリンガー……」

ヒカルたちがいなくなった部屋で、ヴィクセンがぽつりと呟いた。
「なに？」

「ふふ、良い記事のタイトルを思いついただけよ」

そう言つて、ヴィクセンは笑みを見せた。

「あの、カソウ・ヒカルに似合う渾名でしよう？」

煙草に火をつけて、ヴィクセンが言う。

大きく吸つて、一気に煙を吐き出す。懐から取り出した携帯灰皿に煙草の灰を一度落として、また口に啜える。

「……お前も、能力者だったとはな」

アルフレッド少将は知っていたのだろうか。

戻ったら報告せねばなるまい。どんな反応をするのかは想像できなかった。ハウンド自身、どう受け止めるべきか揺れているところがあるのだ。

「聞かなかつたじゃない」

ヴィクセンの返事に、ハウンドはやれやれと溜め息をついた。

能力者は皆、自分勝手に見える。少なくとも、ハウンドには。その力を何のために振るうのか、てんでバラバラだ。ただ、その身勝手さが羨ましいと思えたのも事実ではある。

彼らの年齢だから、今の状況を戦えているのかもしれない。

「それで、これからどうする？」

「お前はどつなんだ？」

ヴィクセンの問いに、ハウンドは同じ問いを返した。

ハウンドの目的は一応達成できた。ヒカルたちの意思を確認し、現状では世界の敵でないことは確認できたと言えるだろう。後はR OVとも接触すべきだが、先ほどの会話を聞くに、今からというのは難しそうだ。

VANの部隊が接近しているのなら、能力者同士の戦闘になる可能性は高い。ヒカルたちも戦いに行ったのだから。実質一人ではないハウンドにVANの部隊と戦うだけの力はない。非能力者であるハウンドが戦うのであれば、準備が必要だ。

ヴィクセンも戦闘行動に関与するつもりはないらしい。遠くから撮影ぐらいはするかもしれないが、実際に戦ったりはしないだろう。ハウンドが攻撃されたとしても、彼女は退避するだろうから。

だとしたら、彼女はこれからどうするつもりなのだろう。もう仕事は終わったはずだ。別々に行動しても良いのである。何故、ハウンドに今後の行動を聞くのだろうか。

「そうねえ、今のあなたを取材しておきたいわね」

ヒカルたちに接触し、言葉を交わしたハウンドに感想を求めようと言っのだろう。

軍人であるハウンドに面と向かって対峙しながら、ヒカルは一步も退かなかった。その上、ハウンドの銃を容易く破壊して見せた。

あの瞬間、ハウンドは死んでいてもおかしくはなかったのだ。

「断る、と言ってもお前はしつこそうだな」

「解ってるじゃない」

煙草を揺らし、ヴィクセンが笑う。

「とりあえず、彼らの戦いが見える場所を探したいわね」

「……そうだな」

ヴィクセンの言葉に、ハウンドは同意していた。彼女と意見が一致したのは少々不服だったが、これからVANと向き合う上で能力者同士の戦いは実際に見ておきたかった。

部下からの報告だけでは理解できていない部分もある。だが、何

よりもヒカルたちの戦いがどんなものかを確認かめておきたかった。本気で戦う姿を見てみたかったというべきか。

今、VANと戦っている勢力の中で最も力を持つとされる能力者の一人なのだから。

第三章

第三章 「霞」

高校を辞めることにそれほど抵抗は無かった。いずれそうなるだろうとは予測していたが、何より友達と呼べる人がいないのも一つの理由だろう。友人は、死んだ。VANに殺されて。

彼女が光を好きだと言ったのには驚いたものだった。光と修に対して良い印象を向ける者は多くはなかった。言いたいことがあるのはつきり言う。たとえ、それが相手にとって一番言われたくないことだったとしても。

他者に対して無関心だった自分にはどうでも良い相手だったが、評判が良くないということは耳にしていた。だから、彼女が何故光を好きになったのか最初は理解できなかった。

だが、今では少し解る気がする。人付き合いが悪いと言うよりは直感で相手が光に対してどんな印象を持っているのかを見抜いていたのかもしれない。相手と気が合いそうなら深く付き合い、そうでない場合は馴れ合おうとはしないのだろう。上辺だけの付き合いで友達と言っている連中とは違っていた。

同じように、人を見る目があった彼女には、光が良い人物だと解ったのだろう。他者との接触を避けていた自分に対しても、その本心を見抜いて積極的に話しかけてきたぐらいなのだから。

(私は、何も変わっていない……)
くれないかすみ
紅霞は目を細めた。

霞にはもう何も残されてはいない。親友を失い、高校生という日常を失い、残っているものがあるとすればVANへの復讐心ぐらいだろう。

だが、それに対して光は変わって行く。いや、彼だって変わっているわけではない。ただ、霞には手の届かない場所まで駆け上って

行ってしまったような気がしていた。

光はROVに良く顔を出すようになっていた。自分自身を鍛えるために、刃や翔を相手に実戦形式で訓練を積んでいる。だが、霞と言葉を交わすことはほとんどない。時折視線が合うぐらいだ。

「……そろそろ、動くか」

刃が呟いた。

廃屋の中にはROVのメンバーが集っている。刃、楓、翔、瑞希、霞の五人が中心に、現地で仲間になった能力者が数名いる。

光たちが完全にVANと敵対するようになってから、ROVの情報源は極端に減った。それは、今までROVに対しても情報をもたらししてくれた誠一という存在が光の側についたからだ。光のチームのためだけに情報を集めるようになった。VANとROV、双方に対して情報を仲介する者が消えたため、互いの動きを読み難くなっていたのだ。

だが、一ヶ月ほど前から、聖一はROVにも情報を伝えてくれるようになっていた。光の特訓に対する見返りとして提示されたのである。

そして、今日、聖一はVANの第一特殊機動部隊が襲撃に来る可能性が高いという情報を提供してくれた。

「撤退するつてのも、ちよつとな……」

翔が呟く。

情報源である聖一が光の側についてから、ROVは勢力拡大を当面の目標としていた。VANが表舞台に出たことで、それに敵対する能力者も少なからず増えると踏んだのだ。その能力者たちを取り込み、ROVの戦力を増強する。

「ダスクの部隊と正面から戦うのは危険だ」

刃が告げた。

VANの蜂起から、ROVはこれまでに勢力を一気に拡大してきた。VANとの戦闘よりも、仲間の確保を優先していた。刃は、VANとの最終決戦に向けての準備だと言っていた。VANが本腰

を入れて世界中を黙らせようとする時、全面戦争が始まる瞬間に決着をつけるのだ、と。

ただ、弊害が発生していた。能力者の練度が低いのである。既に覚醒しており、それを隠して生きてきた者ならばまだいい。だが、覚醒したばかりの能力者はまだまだ未熟だ。ROVの内部でも互いに稽古を付け合っているが、上位部隊との戦闘が始まった際に戦死する者も少なくはなかった。

刃や楓、翔、瑞希などの熟練者や他の支部長権限を与えられた者たちならまだいいが、やはり仲間が減ってしまうのは好ましくない。最近の襲撃も、十分に実力を着けたと思える者を率いて少数精鋭での戦闘に留まっている。

「そうね、あなたたちにはまだ辛過ぎる相手だわ」
瑞希が新入りたちを見回して呟いた。

刃たちがここで仲間を集めていることがVANに察知されていたのだろう。VANの中でもトップクラスの戦闘力と指揮能力を持つダスクを相手に、新入りを抱えたまま立ち回るのは難しい。刃の決断はギリギリまで引き付けて離脱、というものだった。

「来たわ」
今まで目を閉じて黙り込んでいた楓がその目を開けた。

力を解放し、周囲の大气から状況を探っていたのだ。そのレーダーにダスクの部隊が入ったということだろう。

「陣形は？」

「扇状に展開しているわ。後退できる道はあるけれど、怪しいわね」
刃の問いに、楓が素早く答える。

扇状に部隊を展開させ、包囲を狭めてくるつもりだろう。退路があることを考えると、先回りしている者がいるかもしれない。罠である可能性も十分にある。ダスクなら、完璧な包囲網で攻めてくるだろう。

「後退し、敵陣を突破する」
刃の決断は早かった。

先回りされている可能性を考慮しても、人数の少ない方が良い。待ち伏せされていたとしても、一人や二人であれば刃や翔が相手ですれば仲間を逃がすことはできるだろう。

決定が下れば行動は早い。刃と翔を先頭に、瑞希と楓が最後尾につく。霞は、翔の直ぐ後ろについた。

人気の無い路地裏を、素早く駆け抜けていく。

「それにしても、最近の光は凄えな」

翔が呟いた。

こここのところ、光の上達速度は凄まじい。翔の家系に伝わる武術を彼との特訓で半分以上吸収し、刃の速度にも喰らい付いていけるようになっていた。最終的にはまだ負けているが、刃に大しても普通に攻撃を返せるようになっていた。かつて、怒りに任せて刃に戦いを挑みあしらわれていた頃の面影はない。

「そうでなくては困る」

刃の言葉に、翔が苦笑する。

VANを倒す切り札とも呼べる存在が光だった。超越能力を持ち、無限にオーバー・ロードのできるアグニアの弱点が、力場破壊能力を持つ光なのだ。アグニアの力がどれだけ大きくても、光の力はそれをゼロにする。

理論上、光の力に敵はない。全ての攻撃を無に帰し、自分の力だけを相手に届かせる。まさに最強の力だ。

通常型と呼ばれる、最も一般的な力を持つ霞には遠い存在だ。

(光、か……)

特訓のために現れる光の傍には、必ず一人の少女がいる。

セルフアの存在を見た時、霞は一瞬戸惑った。

付き合っていた少女を失い、涙を流した光はもういない。セルフアを見つめる光の眼差しは優しく、力強いものだった。特訓に入った光の瞳には、力と同時に強い意志が宿る。今まで戦っていた時とは明らかに違う表情になっていた。刃とはまた違う、強い眼をしていた。

そして、光を見つめるセルフアの瞳にも同じような力強さがある。お互いに信頼し合い、支え合っているのだと思った。二人の左手の薬指にはめられた指輪がそれを物語っている。

(……私は、何も、変わらない)

誰にも気付かれぬように、霞は息を吐いた。

セルフアに対し、霞が最初に抱いたのは敵意だった。敵であるVANの総帥アグニアの娘だというだけで。今まで、刃に情報をもたらしていたことを理解していても、彼女の姿を見て憎悪を抱きそうになった。

「……あの二人、勝てると思うか？」

小声で翔が刃に問う。

「……勝ってもらわなければ困る」

刃は静かに答えた。

あの二人、光とセルフアのことだろう。光はアグニアに勝てるだろうか。刃は光を切り札として利用するつもりだ。光も、それに気付いているだろう。気付いているからこそ、光が強くなることに刃は協力的だろうと踏んで特訓を依頼しているのかもしれない。事実、刃や翔との模擬戦で光はかなりの力を身に着けているのだから。

最近、光との特訓風景は試合をする度に熾烈なものになっていく。刃や翔も、殺さない、というだけで本気の力を出しているようにすら思えるほどに。

霞の戦う姿を見て光が驚いていたのが、ほんの五ヶ月ほど前のことだとは思えない。親友が死んだことも、もう遠い昔のことのように感じられる。

思えば、あの時から光は既に霞よりも強かった。クラスメイトに紛れていたVANの部隊長に苦戦していた霞をいとも簡単に助けたのだから。

「……あの二人には、死んで欲しくねえな」

翔が呟いた。

その言葉に、刃は視線を細める。かつて、刃は大切な人を失った

と聞いた。それが誰なのか知っているのは、楓と翔、瑞希の三人だけだ。ROVの初期メンバーであり、昔馴染みでもある三人しか、知らない。ただ、その事件が刃をVANと戦う道に進ませたのだということだけは霞も知っている。

だから、互いを大切な人であると認識している光とセルフアには生き延びて欲しい、翔はそう言っているのだ。

光と刃が、対照的にも見えた。刃は大切な人を失ったことで、VANへの復讐を誓い、戦っている。それに対して、光は大切な人を守るためにVANを倒そうと戦っている。

(美咲……)

霞は亡き親友を思う。

もし、親友が生き延びていたとしたら、光の隣には彼女がいたのだろうか。指輪をしていたのは彼女だったのだろうか。セルフアは、どうしたのだろうか。何より、光はどう生きようとしていたのだろうか。

光を好きだと相談されたことがあった。同じクラスだからという理由で光の印象を聞かれたことがあった。良く判らない、と答えた覚えがある。ただ、それから何となく光を観察していて、少し興味が湧いたのも事実だった。

親友が好意を持った相手が、どんな人物なのか知りたいと思った。今まで他人に興味は持つまいと心に誓っていたのに、それが簡単に崩れ去ったことに自分でも驚きながら。

親友が死んだ時、光を殺してやるうかとも思った。だが、逆に慰められたのは霞の方だ。何故、光に自分の内心を吐露してしまったのだろうか。見せまいとしていた弱さを晒してしまった。

「刃、前方に敵よ」

楓の知らせに、刃が翔と視線を交わす。

「私がやるわ」

霞は静かに刃の背中に声を投げた。

刃が振り返り、霞を見る。向けられる視線を、霞は受け止める。
「私が囿になる」

相手がダスクなら、あらゆる状況を想定しておくべきだ。ここで戦力を割いてしまったら、更に先の方で待ち伏せされていた時に苦戦するかもしれない。今いるメンバーの中で、刃たちROVの中核メンバー四人を除いて最も戦闘経験が長いのは霞だ。

戦力の分散を極力避けるためには、霞から囷になるべきだろう。

「聖一からの情報なら、光たちも来るんでしょう？」

恐らく、光たちにもダスクの部隊が来ていることは伝わるはずだ。なら、VANの部隊への奇襲を狙っている彼らならこの場に乱入してくる可能性は高い。

それまで持ち堪えることができれば、後は光たちが敵を駆逐してくれるかもしれない。一時的に光たちと合流し、また刃の下へ戻ればいい。刃なら霞の意図も読めるだろう。

「危なくなったら身を隠せよ？」

「解ってる」

翔の言葉に、霞は無表情のまま答えた。

霞は敵がいるであろう前方へそのまま進み始めた。刃と翔は仲間を連れて途中で道を逸れ、逃走経路をずらす。

走りながら、霞は具現力を解放した。紅い防護膜が霞を包み込む。知覚と身体能力が拡張され、踏み込みの速度が上昇していく。周囲に視線を走らせ、警戒しながら進んで行った。

敵は直ぐに発見できた。路地裏を挟む建物の屋上から、VANのスーツを身に着けた人影が飛び降りてくる。防護膜の輝きを見て取り、能力者であることを確認した。

霞は走る速度を落とさず、右手から放った閃光で敵を迎撃する。紅い閃光は細い鞭のように曲線を描きながら、敵へと伸びて行く。敵の一人が閃光で霞の攻撃を相殺する。攻撃同士が接触する瞬間、霞は閃光を拡散させた。ただの拡散ではなく、筒がそのまま縦に裂けるように幾本もの閃光に分離させるような拡散のさせ方だ。

攻撃を散開させることを読んでか、敵も閃光を拡散させて対応したが、散らせ方が弱い。ショットガンの弾のような散り方では、閃

光のまま分解させた霞の攻撃に比べて密度が低い。相殺できて半数程度だろう。十分押し勝てる。

敵の額に伸びる閃光が横合いから飛んできた攻撃によって打ち消された。もう一人隠れていたらしい。時間差をつけて別の人影が路地裏へと飛び込んでくる。

霞は先に着地している方へと足を向け、閃光を放った。敵が相殺の攻撃を放つ瞬間に閃光を炸裂させて目晦ましにすると、霞は大きく踏み込んだ。目晦ましが消えると同時に敵の懐に飛び込むが、そこに能力者はいない。

振り返りざまに回し蹴りを放ちながら、上空に掌を向けて閃光を放つ。真上に逃れた場合を考慮しての攻撃だったが、敵は霞の回し蹴りを腕で防いでいた。放った閃光の向きを変化させ、敵の真上に垂直落下させる。

もう一方の敵がその閃光を横から打ち消した。

舌打ちして、霞はその場から飛び退いた。横合いから飛んできた攻撃が地面を抉る。目の前の敵が霞に踏み込んでくる。繰り出される拳の手首を右手で掴み、左手を肘に当てる。勢いを利用して右手を引き、左手で押さえた肘関節を無理な方向へ曲げてやる。

間接を砕くはずだったが、相手の防護膜は霞の力に耐えうるだけの力を男の肉体に付与していた。肘に当てた手から閃光を放とうとした瞬間、横合いからの閃光に霞は飛び退いていた。もちろん、手は放している。

(さすがに、手強い……)

第一特殊機動部隊の隊員だけあって、練度はかなりのものだ。

霞の力は特殊なものではない。具現力の中では最も一般的とされる通常型の能力者だ。霞が今まで生き残ってこれたのは、昔からの経験だ。二年前に覚醒した刃より以前から、霞は能力者として覚醒していた。

だが、刃はあっさりと霞を追い越して行った。

そこには、刃がVANと戦うことを決意した経緯が根底に存在し

ている。刃の行動の原動力となっているのは、その経験だ。大切な人を殺されたことで、刃はVANに憎悪を抱いている。

(なら、私は、何のために戦っている……?)

敵の攻撃を捌きながら、霞は眉根を寄せた。

自分が戦う理由は何なのだろうか。刃はVANに対する復讐心から、光は大切な者たちを守るために、戦っている。霞には明確な理由がない。

親友を殺されたというのも理由の一つではある。だが、だとしたらそれ以前の霞は何故ROVに入ったのだろうか。能力者の存在を知り、VANを知った時点でVANに渡っていたら、親友は死なずに済んだかもしれないのだ。もっとも、VANに入っていたら彼女と親友にはなっていなかったかもしれないが。

覚醒した直後、力を暴走させて家族を失った。その原因を作ったのは覚醒を促したセイナだ。だから、霞は戦うことを選んだのだろうか。

もしかしたら、霞は具現力を怨んでいるのかもしれない。こんな力さえ無ければ、霞が家族を失うことは無かった。家族がいたなら、霞の性格も変わっていただろう。

(何を今更……)

自嘲気味に笑う。相手の右ストレートを、左脚を軸に回転してかわす。

遠心力で加速させ、渾身の力を込めて振るった裏拳が敵の顔面を打ち砕いた。辺りに血と肉片が撒き散らされる。

頭部を失い、慣性に従って吹き飛ぶ死体には目もくれず、次の敵へと意識を向ける。向かってくる閃光を首を逸らしてかわし、踏み込んだ。

(もう、何も感じない、か……)

すつと、目を細める。

(……光は、まだ抵抗感を持っているんだろうか……)
人を殺し続けて生きてきたせい、その行為が当たり前のように

感じ始めていた。誰かの人生を破壊して、自分の人生を歩んでいく。自然界では当然とも思える弱肉強食の世界だ。人間だけが違う道を進んでいた。他者を殺すことを善しとせず、共存を探る生き方をしている。法律というものを創り、社会を形成してきた。

だが、能力者の力はそれを逸脱する。いや、簡単に逸脱できるだけの力を持っている。具現力によつては人に悟られずに隠蔽でき、また咎めてくる者を全て排除するという強引な手段も取ることができる。恐らく、世界はそれを善しとはしない。ルールを破る可能性があるのも確かだが、何より世界はその力を恐れている。世界を掌握することすらできる力が、そこにあるから。

ハイキックを屈んでかわし、足を払う。体勢を崩しながらも、敵は光弾を放つ。霞はその敵の懐に身体を押し込んで、肩で鳩尾を突いた。

吹き飛ぶ敵に幾筋もの閃光を放った。背後の壁に背中から激突しながらも、敵は霞の攻撃を全て相殺する。

自分の力に、力不足を感じていた。第一特殊機動部隊とはいえ、隊員ですら薙ぎ払えない力が怨めしい。上位クラスの隊長とどうにか戦えるレベルの霞には、特殊部隊の隊員を簡単に葬るだけの力はない。長年戦つて来たというのに、刃に追い抜かれ、ほんの五ヶ月ほど前に覚醒した光にすら数日で抜かれてしまった。

刃は古流武術の家系に生まれ、天賦の才があったのだろう。だが、戦いを好まず、望みもしなかった光の力にすら及ばなかったのはシヨックだった。後に光も戦うことを選んだが、それでも好戦的な性格ではないものの力が強力であることに不平を感じる。

突撃ながら敵が閃光を放つ。大きく跳躍してかわし、敵を跳び越える。向かいの壁を蹴って瞬時に方向を転換し、そのまま敵へ跳び蹴りを繰り出した。

咄嗟に腕で顔を庇う敵に、足先に纏わせていたエネルギーを解き放つ。相殺し切れずに腕が吹き飛んだ敵の顔面に踵が突き刺さり、貫いた。頭部が破砕され、鮮血と内容物を撒き散らす。

着地と同時に周囲を見回し、霞は呼吸を整えた。誰もいないことを確認し、先へと進む。まだ罾があるのなら、引つ掛かる罾は必要だ。刃たちの方に向かう敵の数を可能な限り減らすためには、罾である霞が待ち伏せされているであろうルートを突き進んで注意を引き付ける必要がある。

道を走りながら、つくづく自分の弱さに厭きれていた。刃ならあの程度の能力者に呼吸を乱したりはしないだろう。光だってそうだが軽く仕留められたに違いない。刃には具現力の中で最速を誇るスピードがあり、光には最強の防御能力がある。ただの通常能力では、到底追いついてはいけない領域だった。

ふと、前方に人影が見えた。

「……女の子？」

場違いな驚愕の声に、霞は眉根を寄せる。

霞と一つ違うか違わないかという年齢の少年だった。鮮やかな朱色の防護膜に身を包んでいる。その朱に染まった瞳が大きく見開かれている。

一瞬、敵なのかどうか判断に迷った。

「……あなた、敵？」

霞は問う。

能力者に年齢は関係ない。覚醒してからの年月に影響はあるが、実年齢と戦闘能力との関係はほとんどないと言っても過言ではない。それに、能力者の強さには性別も無関係だ。持つ能力と、戦闘センスと訓練によって強さは決まる。

敵だとしたら、新人なのだろうか。練度が低いのなら助かるが、第一特殊機動部隊という精鋭部隊にそんな能力者が回されるとは思えない。

だとしたら、相当な戦闘力を持つ新米ということか。厄介かもしれない。

「君は、ROV、なのか……？」

どこか信じられないとも言いたげな表情を見せる少年を、霞は

冷ややかな視線で見つめていた。

殺気が感じられない。隙だらけの構えに、強さは感じられなかった。それでも、霞はこの少年が高い戦闘能力を秘めているのだと確信していた。

何故だろうかと考えて、霞は思い当たった。

(光に、似てる……?)

覚醒した直後の光にどこか似ている気がした。人を殺すだけの覚悟を決めていなかった頃の光だ。

少年の顔付きにも、光の面影があるように見えたが、気のせいだろう。

「……そう、敵ね」

霞は駆け出した。少年の反応に、VANの能力者なのだと確信した。この場にROVの能力者が現れることを知っているのは、VANの能力者だけだ。待ち伏せしていたからこそ、ROVであるのかと問えるはずだ。一般人なら、霞を見た瞬間に逃げ出している。

「敵、なのか……!」

やりきれないとも言えるように表情を歪め、少年は呟いた。

繰り出した光弾を、少年は簡単に相殺して見せる。

「君は、何でROVにいるんだ?」

「なら、あなたは何故VANにいる?」

少年の問いに、霞は同じ問いを返していた。

答えるつもりはなかった。無言で、敵を葬るつもりだった。だが、彼の問いは、どこか癪に障った。今までの自分を否定されているように。

「こんなくだらない戦いを早く終わらせるために」

「……無視すべきだったわ」

返答に、霞は落胆した。

重みの無い答えだと思った。そんなのは綺麗事でしかない。

くだらない戦いだと割り切れるのは、そこに感情が無いからだ。

刃や光のように、復讐心や希望に向かうだけの意志が見えない。あ

つたとしても、そんな口調や言葉では伝わってこない。

「なら、君が戦う理由は何だ！ 能力者同士が戦う必要なって無いじゃないか！」

霞の繰り出す拳を、少年が左右に動いてかわす。

「あなたには解らない」

「そんなの我俣じゃないか！」

相手との和解を拒否することが我俣だろうか。そうかもしれない。だが、それを言うなら最初に我俣を通そうとしたのはVANの方だ。何もかも失くして、一人きりとなった霞は、もう誰とも関わりたくなかった。干渉を止めなかったVANに抗うのは当然のことだろう。「あなたたちの我俣で、私の親友が殺された」

復讐するには十分な理由だろう。力を持つ者ならばともかく、力を持たぬ友人の命を奪ったことは許せない。幸せそうに笑う彼女の姿を見ることはもうできないのだから。きっと、霞が心の底から笑うことももう無いだろう。

「だから、こんな戦いは終わらせなきゃいけないんじゃないか！」
過去を水に流せとでも言うのだろうか。そんなことできるはずがない。

VANとの和解をして、誰が得をするのだろうか。戦いの日々からは抜け出せるかもしれないが、それで気分が晴れるとは思えない。VANと戦う道を選び、敵を倒し続けてきたのだから、今更後には退けないのだから。

彼は何も知らないのだ。親友が能力者でなかったことも、戦って死んだわけでもないことを。VANと戦う能力者に恋をして、巻き込まれただけだというのに。

「殺そうとしている相手に、話しかけるなんて何様のつもり？」

霞は苛立ちを隠さずに告げた。

戦う相手が知り合いでもなければ、言葉を交わす必要などどこにもない。命を奪う相手を知るということは、それだけその人を殺し難くなるのだから。無言で戦えば良いのに、何故それをしないのか。

何故、話しかけてくるのだろうか。腹が立って仕方がない。

「私が女だから？ それとも子供だから？」

「それは……！」

「だったら、私が男だったら、大人だったら、あなたは話しかけることなく戦えた？」

口を開く少年の言葉を遮って、霞は言い放つ。

もし、霞が男だったなら、彼は普通に戦っていたのだろうか。霞が大人だったなら、言葉を交わすこともなく戦闘に集中できたのだろうか。

恐らく、違っだろう。彼自身がまだ本物の戦いというものを知らないのだ。きつと、これが初めての戦闘なのだろう。

「もういいわ。そんなに戦うのが嫌いなら黙って殺されてくれない？」

言いながら、霞は歯噛みしていた。

会話しながらとは言え、霞は全力で戦っている。少年はそれを簡単にかわしているのだ。掠りもしない。光弾なども容易く掻き消されている。

(こいつ……！)

具現力のポテンシャルが尋常ではない。敵は息を切らしてもいないのだ。一般隊員たちとは明らかに違う。素人のクセに素質が凄まじい。

「君を殺して、戦いが終わるわけじゃないだろ！」

少年の言葉に、霞は返事をしなかった。

霞を殺しても戦いは終わらない。レジスタンスに分類される能力者全てが死なない限り、戦いは終わらないだろう。それでも、覚醒する者は現れ続ける。ならば、永遠に戦いは終わらない。VANという、組織が潰れでもしない限り、能力者同士の戦闘が終結することはないのかもしれない。

少なくとも、今この瞬間の戦闘行動に片は付くが。

「力を力で捻じ伏せて、理解し合おうとしないなんて我俣じゃない

か！」

少年が叫ぶ。

理解を示さなかったのはVANの方ではなかっただろうか。霞にしてみれば、VANの方が我侭だ。能力者のために動いていると言っているが、邪魔な能力者は排除しようとする。VANに属さぬ者を敵に回し、消そうとする行為が我侭でなくて何だと言うのだ。

もし、霞の気持ちが我侭だとしたら、どうすればいいというのだろうか。今更VANへ来いとも言うのだろうか。大人しく殺されろとも言うのだろうか。

少年の言葉こそ我侭ではないのだろうか。霞の意思を理解してもないクセに、一方的な意見を押し付けてくることは我侭ではないとも言いつもりなのだろうか。VANに属することを拒んだ者たちの意見を聞くこともしないことこそ我侭だろう。

理想論や綺麗事だけで世界が成り立つのであれば、そもそもこんな戦いは起こらなかつたはずだ。平和な世界が出来上がっていたに違いない。だが、現実が違う。

(過酷な目に遭っていないから、そんなことが言える！)

そう感じた。霞は家族を亡くし、刃は大切な人を亡くし、光は日常を失った。復讐を誓う刃の目に一切の迷いは無い。光は、揺れながらも、自分の意思を曲げずに歩き続けている。霞の親友、美咲の死を、光はきつと乗り越えている。復讐に走ることもなく、今まで通りの信念で戦うことを選び続けていた。

あの強さが欲しい。純粹に、そう思う。

大切なものがある強さは、霞には無い。

「俺は君だって殺したくない！」

「なら、あなたは私の彼氏になってくれるとも言うの？」

「それは……」

「冗談じゃない！」

口籠る少年に、霞は吐き捨てた。

もし、互いに命を落とすことなく霞を止めるといふのなら、それ

だけの覚悟は必要だ。霞の今までの人生全てを背負うだけの覚悟がなければ、戦いを止める理由にはならない。今までの全てを捨てても、戦いを止めて生きたいと思えるだけの理由がなければ、ROVを抜けたりはしない。

だが、たとえこの少年がそれを承諾したとしても、霞に彼を生涯の伴侶とするつもりはなかった。

「私はあなたの仲間を殺したし、あなたの仲間は私の仲間を殺して
る」

忘れたのかとも言いたげに、霞は少年を見据える。

この場に辿り着くまでに、霞は二人の能力者を殺した。そして、これまでV ANの能力者によって殺された仲間も少なくはない。溝は深いのだ。埋めることなどできはしない。

新入りだとしても、同じ部隊に配属されたのだから顔見知りぐら
いではあつたはずだ。霞がV ANに入ることは、彼らの死を無駄に
することでもある。そんなことも解らないのか。

「どうして、そう身勝手なんだ！」

少年の瞳に、敵意が宿る。

霞の拳を打ち払い、少年が突きを繰り出した。弾かれた腕に体勢
が崩れる。打ち払うという行動ですら、それだけの威力があつた。

「……っ！」

拳が左肩に突き刺さる。凄まじい衝撃に、身体が木の葉のように
吹き飛んだ。

かわせなかつた。体勢が崩れていたせいで、ボディへの直撃は免
れたが、左腕が使い物にならなくなった。たった一撃で左肩の間接
は粉碎された。骨の破片が内側から肉に突き刺さり、激痛が走る。
内出血や筋肉の断裂も起こしているはずだ。

地面に叩き付けられ、転がりながら、右手を突いて身体を押し留
める。痛覚にしか反応を示さない左腕を無視して、霞は起き上がっ
た。もし、防護膜による痛覚抑制効果がなければ立ち上がることな
どできなかつただろう。そして、霞はそのまま、少年へ真っ直ぐ突

っ込んだ。

「解つただろ、君じゃ俺は殺せない！」

「勝ち目があるから戦ってるわけじゃない！」

叫び、霞は拳を打ち込んだ。

掌で受け止めた少年に回し蹴りを浴びせるが、もう一方の手が足を掴んだ。

たとえ勝ち目のない相手でも、引くわけにはいかない。それが霞たちの戦いでもあるのだ。勝てる勝てないよりも、抗うか否かだった。抗わなければ殺されるなら、抗って殺される方がまだ後悔しない。だから、戦う。

「殺す覚悟がないなら、戦士になんてなるな！」

不公平だと思った。何故、こんな奴が自分よりも強いのだろう。どうして、全く歯が立たないほどの力を持っているのだろう。

一閃した右腕を、少年は屈んでかわす。膝蹴りを繰り返そうとするも、少年の肩が霞の下腹部に減り込んだ。

「あが……っ！」

息が詰まったと思った瞬間、後方へと身体が飛んだ。背後の壁に背中から叩き付けられ、肺の空気が全て押し出される。壁には亀裂が入り、霞の全身に衝撃が伝わる。破碎された左肩に激痛が走り、砕けた骨が内側から皮膚を突き破り出血を起こした。

飛びそうになる意識をどうにか繋ぎ止め、二重にブレた視界で少年を睨む。

「ぐ、う……はあ……」

呻き声を出して、どうにか息を吸い込んだ。

「もう、いいだろ……！」

戦闘の停止を訴える少年へ、霞は一步踏み出した。ぐらつく身体を強引に前へと押し出す。倒れ込む勢いを利用して、駆け出した。足を動かす度、振動が左肩に痛みを走らせる。衝撃の抜け切らない身体を走らせて、霞は右の拳に全力を集中させた。

「あああああ　っ！」

腹の底から叫び、霞は振り被った拳を思い切り突き出す。

今出せる全ての力を右手と踏み込む速度に乗せて、渾身の一撃を繰り出した。紅い閃光に包まれた霞の拳に、少年が目を細める。悔しさと辛さの入り混じった視線の中には、確かな敵意があった。

姿勢を低くして踏み込み、右腕が内側から外へと振り払うように一閃される。霞の拳は、少年の髪の毛の先端を掠めただけだった。

左の脇腹を吹き飛ばされ、衝撃に霞の身体が舞う。錐揉みしながら、霞は直ぐ傍の建物に左肩から激突する。破碎された間接が更に粉碎され、複雑骨折が肋骨や上腕にまで及ぶ。砕けた骨が肺に突き刺さり、激痛が脳を貫いた。

叩き付けられた壁には亀裂が入り、夥しい量の血がぶちまけられる。両脚を着いた霞だったが、立っていられず壁にもたれかかったまま、血を吐いた。

もう、左腕は千切れてしまってもおかしくない状況だった。脇腹は大きく抉り取られ、出血と共に内臓がはみ出している。致命傷だと気付くのに、時間はかからなかった。服を濡らし、血が地面に滴り落ちる。戦う意思はあっても、もう身体についてはこなかった。

(……終わるのか)

漠然と、そう思った瞬間だった。

「霞っ！」

声に、霞は閉じようとしていた目を見開いた。

自然と、目を向けていた。

「ひか、る……？」

現れたのは、光だった。声が聞こえた直後には、既に霞の目の前にまで辿り着いている。敵の存在は、もう霞の目には入っていない。視線を向けたことで身体のバランスが崩れ、倒れそうになる。それを、光が受け止め、支えてくれた。仰向けに抱きかかえるように、寝かせてくれる。

「霞！ しっかりしろ！」

必死に呼び掛けてくる光に、霞は悟った。きっと、光も霞の傷が

致命傷であることに気付いている。

「……………ごほっ」

口を動かそうとして、吐き出せたのは血だけだった。

「喋らなくてもいい！ 気をしっかり持っていてくれ！ 直ぐに治癒してやるから！」

光が捲くし立てる。光の仲間であるセルフアが有希なら、傷を癒すことができる。致命傷であっても、即死さえしなければ一命を取り留めることはできるはずだ。

だが、光が一人できた時点で、それは叶わないのだろうと思った。常に一緒だったセルフアがいないことが、それを証明している。何らかの理由で光一人しかここまで辿り着けなかったのだ。もし、仲間が追いついてきたとしても、時間がかかるに違いない。

「……………いい……………もう、眠らせて」

口の中に溜まった血を溢れさせながら、霞は告げた。

いつそ、死んでしまった方が、気が楽だ。何も考えず、悩まずにすむ。他人との関係に気を遣うこともなくなる。親友の仇を討てなくなるのは心残りだが、彼女の下へ行けるのなら悪くはないとも思えた。

「駄目だ！ 美咲の仇を討つんじゃないのか！」

光が叫ぶ。

（そうか……………私……………）

ふと、気付いた。最初から、仇討ちにはさほど執着心は無かったのだと。

親友が死んだ時、確かに霞は悲しんだ。光に辛く当たったりもした。だが、それは美咲が霞にとって大切な存在であったからではなかった。いや、確かに美咲は霞にとっては掛け替えの無い友人ではあった。ただ、親友と呼ぶには月日が浅過ぎたのも事実だ。

「……………光、お願い」

「霞……………？」

ゆっくりと、霞は光の頬に右手で触れる。どうにか動く右手で、

今日の前にいるその存在を確かめるように。微かにかかる光の吐息が暖かい。

「キス、して……」

その言葉に、光は驚いたように目を見開いた。

「……好き、だった……ずっと、前から……」

涙が零れる。ようやく、気付いた。

彼に興味を持つようになってから、霞は光に惹かれていった。人を殺すことに抵抗を覚えながらも、光は平穏な日常を諦めずに戦うことを選んだ。その光が、霞は昔の自分に似ているのだと言った。いつか、光のように、自分に自信を持てるようになるのだろうかと思っていた。

辛く当たったのも、自分では手を伸ばせない苛立ちからの八つ当たりだったのだ。美咲と同じように、霞もあの頃から光を好きになつていたのである。仇を討つと言ったのも、光がそれを拒んだからでも、美咲が親友だったからというよりも、光が背負うものを軽くしてやりたかったからなのかもしれない。

そして、セルフアに抱いたのは憎悪ではなく、嫉妬だったのだ。

もしかしたら、美咲にも嫉妬していたかもしれない。

(小さいな、私……)

心の中で、霞は自嘲した。こんな状況で言い出すのは卑怯だろう。それでも、気付けないまま死ぬよりは良かったかもしれない。求めなければ、可能性など存在しないのだから。

「……ごめん」

光は苦い表情で呟いた。唇を噛み締め、申し訳なさそうに霞を見つめる。

薄々、気付いていた。光は霞を恋愛対象になれる相手としては見えていない。同情の対象や、過去の自分と重なる相手としてしか見ていなかったに違いない。

「馬鹿……こういう、時は…嘘でも、するもの、じゃない……」

光は自分に嘘をつこうとは思わない。たとえ、それで他人を傷付け

ようとも、自分の理念を曲げようとは思わない。それも解っていた。それでも求めたのは霞の弱さだろう。強くありたいと願うこと自体が、弱さの証明なのかもしれない。

我俣かもしれない。それでも、我俣でなければ望むものなど手に入らない。自分を押し込めて、他者との激突を避ける生き方をして、楽しくなんてなかった。我俣を言い合って、互いに納得できる道を探すのが、光の生き方に思えた。

（でも、だからこそ、そんなあなたが　　）

掠れゆく意識の中、最後に光へ優しく微笑んで、霞は目を閉じた。想い人の腕の中で眠れるのなら、そう悪くはない。誰を恨むでもなく、安らかな気持ちで霞は深い眠りへと落ちて行った。

第四章

第四章 「進むべき道」

セルフアはシュウ、ユキ、セイイチ、アルトリアの四人と共にダスクとその副官リゼ・アルフィサスの二人と対峙していた。ヒカルは、先に進んだ。兄であるアキラに会うために。それを許したのはダスクだった。

アキラの決断を確かめてこいと、ダスクはそう告げてヒカルだけが先へ進むことを許可したのだ。部隊の仲間にもヒカルを攻撃しないように指示してあるとも言った。実戦に初めて出たアキラの覚悟を固めることも目的だろう。ROVとVANの戦闘に触れ、人を殺すことがどんなものであるかを知り、その道へ進む覚悟があるかどうか、最後の確認をしたいのだ。

本当はセルフアも一緒に行きたかった。だが、それをダスクは善しとはしなかった。

「さて、お前たちの力も確認させもらおうか」

ヒカルが十分遠ざかったのを確認して、ダスクは口を開いた。

「それは、殺し合いで？」

シュウが問う。

「いや、手合わせだけだ」

ダスクに与えられた任務はROVの殲滅だけであるとのことだった。だが、ジンたち四天王がいたことで、このROVの殲滅は既に失敗といえる状況のようだ。多くのレジスタンスに逃げられたらしい。

ダスクの作戦は、扇状に展開させた部隊と、逃げ道を封じるように配置した待ち伏せ部隊とでの挟み撃ちにするというものだったようだ。だが、ジンはその作戦を読み、包囲網がギリギリまで狭まるまで待つことで、敵部隊の拡散を防いだのである。練度の低い新入

りを連れた状態では、敵を密集させておいてジンたち主要メンバーが突破する方が被害が少なくて済む。展開しているダスクの部隊がROVのメンバーを捉える可能性は高くなるが、部隊の密度が高いということはそれだけジンたちの攻撃で薙ぎ倒される数が増えるということだ。

ジンたち四天王さえいなければ、この場にいたROVは殲滅できただろう。既に作戦が失敗したのだと判断したダスクは、自分の部隊の被害を減らすために撤退命令を出したようだ。ダスクの率いる機動部隊では、ジンたちを倒すだけの戦力はない。

後から現れたヒカルたちを見て、ダスクの独断で今の状況が作られている。

「頼めるか？」

「俺の実力も確認できそうだしな」

ダスクの言葉に、シュウが身構える。ユキ、セイイチ、アルトリアが少し後退し、スペースを作る。

「セルフア、あなたもね」

そう言つて、リゼがセルフアの前に立った。

「リゼ……？」

「あなたも、守られてばかりじゃあいけないでしょう？」

リゼの言葉に、セルフアは頷いていた。

ヒカルはセルフアが戦うことをあまり快く思っていない。戦闘に不慣れなセルフアを危険に晒したくないのだ。だが、セルフアはヒカルの支えになりたい。互いに支え合うと誓つてもいる。

セルフアが戦うことを、ヒカルは納得しているのも事実だ。ただ、傍にヒカルがいる時は、ヒカルが戦っているだけだ。いつも一緒にいるから、ヒカルが戦っているに過ぎない。もちろん、ヒカルが戦っている間、セルフアだつて何もしていないわけではない。空間干涉能力を広域に展開し、周囲の状況を常に把握している。それをヒカルに伝えたり、シュウやセイイチに教えたりもしていた。

上位部隊長クラスの実力を持つリゼに張り合えるようなら、いざ

という時セルフアが戦うことでヒカルの助けにもなるはずだ。

ダスクとシユウは既に手合わせを始めている。

本来なら把握できないはずのシユウの空間破壊攻撃を、ダスクはかわしていた。シユウの視線や身体の動き、タイミングなどから瞬時に攻撃場所を逆算しているのだ。長年の戦闘経験のあるダスクだからこそ、シエイドのような芸当ができる。シユウもフェイントを織り交せていたが、見抜かれていた。

互いの実力を量りあいながら、少しずつ戦闘のテンポを上げて行っている。

「行くわよ？」

リゼの言葉に、セルフアは身構えた。

ヒカルがROVでジンやシヨウと特訓を重ねていた時のことを思い出す。あの時のヒカルの構えを真似て、セルフアは肩幅を開いて両腕を胸の高さまで持ち上げた。

同時に、空間干渉の範囲を自分が戦うであろう範囲に狭める。そうすることで、少ない精神力で干渉の密度を上げることができる。

リゼが地面を蹴る瞬間、足に衝撃を発生させた。その反動で大きく加速し、一気にセルフアとの距離を詰める。

セルフアは自分の身体を動かすように干渉し、横にステップを踏むように跳んだ。戦闘に不慣れで、訓練もしておらず筋力も低いセルフアが戦うには、自分の身体を空間干渉で素早く動作させるしかない。自分の運動能力では、力を解放していないリゼにすら追いつけないのだから。

リゼが進行方向を直角に捻じ曲げ、セルフアを追い掛ける。衝撃を身体の各部に発生させ、ブレーキと旋回、加速を的確なタイミングでほぼ瞬時に行っているのが解る。

速度を落とさぬ軽い跳躍から、リゼが回し蹴りを放つ。空中で衝撃を二度、三度と後方へ放ち、反動で身体を持ち上げて高度を保ちながら加速し、セルフアを間合いに捉えてくる。繰り出される蹴りにも、衝撃波による加速を行い、最初からトップスピードで打ち込

んでくる。

セルファは蹴りの命中する寸前に、空間に干渉して圧縮空気の壁を作り出す。リゼの蹴りがその空間に触れた瞬間に圧縮した空気を解き放ち、その衝撃波でリゼの蹴りを押し留めた。

「ちゃんと追いついてこれるじゃない」

少し感心したように、リゼが呟く。どこか嬉しそうにも見える。

セルファも、褒められたようで少し嬉しかった。

セルファにとって、兄と呼べるのがダスクであるのだとしたら、リゼは姉と言ったところだろう。VANの中で、ダスクと共にセルファを一人の少女として見てくれた人物だ。話し相手になってもらったことも少なくはない。

リゼが少しずつ攻撃を激しくしてくる。

弾丸のように小さく、鋭い衝撃波を、セルファは空間干渉により防いでいく。空間の一部を捻じ曲げて方向を逸らしたり、圧縮空気による破壊力で相殺したり、同じ衝撃を叩き付けて打ち消したり、その場その場で様々な攻撃方法を試して行った。

理論上、セルファの力は全ての具現力を再現できる。それを確かめ、同時に今の自分がどれだけ応用させていけるかを知るために。

「でも、良かったわ」

手合わせを続けながら、リゼがセルファに話しかけてくる。

「最初の報告では、ヒカルが死んだってことになっていたから」

一ヶ月前の戦いで、ヒカルは一度命を落としている。その命を拾い上げることができたのは、ジンのお陰だ。

VANにはヒカルが死んだと報告がされたようだ。もちろん、それは直ぐに撤回されただろう。シェイドが撤退した時点では、ヒカルは確かに死んでいたのだから。

「あの時は、凄く怖かった……」

セルファは少しだけ目を細めて答えた。

今でも、あの時のことを考えると身震いをしてしまう。真っ黒な暗闇のようなものが心の中に広がって行くようなあの絶望感は、二

度と味わいたくない。

ただ、それだけヒカルのことを想っているのだとも知ることができた。

「シェイドも凄く驚いていたわ」

ヒカル生存の報告でシェイドはさぞ驚いたことだろう。肉体的な外傷によるダメージのシユウとは違い、ヒカルの身体は無傷だったのだ。あつたとしても擦り傷などの小さなものでしかない。外傷によつて致命的なダメージを受けたわけではないヒカルを蘇生させるのは不可能だと判断できたから、シェイドも撤退したのだろう。

セルファがユキの力を再現して傷を癒そうにも、治療しなければならぬ傷というものが無かつたのだから。

シェイドが仕留めそこなつた能力者は、ジンを除けばヒカルが二人目ではないだろうか。実力自体は間違いなくシェイドが勝つていた。助かつたのは間違いなく奇跡だ。ただ、あの経験によつてヒカルは更に強くなっている。寿命は大きく消費してしまつたが、精神力はかなり鍛えられているはずだ。ジンの特訓でも、戦う度に力を増して行くのが見ていても判る。

「ヒカルは死なせない」

リゼが打ち込んでくる拳を、セルファは空間を捻じ曲げて逸らした。

既に、ヒカルの寿命は大きく削られている。十年刻みで消費してきたとしたら、既にヒカルは五十年分の寿命を使つてしまつた計算になる。セルファの能力による把握も完璧ではなく、曖昧だ。大体このぐらい、までしか判断できない。精確な寿命を知ることができなかった。

これ以上、ヒカルにオーバー・ロードさせるわけにはいかない。恐らく、アグニアと戦うためにはオーバー・ロードが必要になるだろう。オーバー・ロードを続けて、無限に力を引き出せるアグニアに対抗するには、ヒカルもオーバー・ロードで力を高めるしかない。だから、アグニアと対峙するその時まで、ヒカルにオーバー・

ロードはさせたくなかった。

「強くなったわね、あなたも」

リゼが優しく微笑んだ。その言葉に、セルファははっとした。

かつて、VANの中にいた頃のセルファは力を持ちながら無意識に他者を頼っていた。それが、ジンを始めとするROVだ。最初は世界各地の反抗勢力の能力者に情報を流すだけだった。やがて反抗勢力をROVが吸収し、ジンが束ねるようになっていった。

だが、ヒカルと出逢ったことで、セルファは変わった。彼の心に触れてから、セルファは自分から動きたいと思うようになっていった。自分には何もできないのだと決め付けていたことに気付かされたのも、ヒカルの言葉がきっかけだった。

VANの中で生まれ育ったことで、自分だけがVANの思想とは違うことに孤独感を抱いていた。それが、周りの皆とは違うから自分一人では何もできないのだ、と感じるようになって原因なのかもしれない。だから、外に意識を向け、VAN以外の者に縋るようになったのだろう。

自分が小さく、弱いものだと思い込んでいた。今でもそれは変わらない。ただ、強くなりたい、強くありたいと思うようになった。

VANを抜け出して、ヒカルに逢うために全てを捨てた。愛情をくれない両親と、自分を特別な存在としてしか見てくれない視線から逃げて。その代償が、ダスク、リゼとの敵対だ。それでも、セルファはヒカルに逢いたかった。

「私が、ヒカルを支えるんだから」
言つて、セルファも笑みを返した。

ヒカルと力を比べたら、セルファは非力だ。多彩な攻撃は可能だが、力場破壊によって全てを消されてしまう。セルファの力は力場で包み込んだ空間の中における事象を操作する。空間を覆う力場があるのが前提条件の力なのだ。その力場を破壊することのできるヒカルには、どうやっても勝ち目がない。父親であるアグニアから受け継いだ超越能力も、力場破壊には抗えないのだから。

唯一、自分の防護膜を力場として作用させる方法もあるが、それでは使える力が限られてしまう。範囲内の事象を操るといった特性を活かし切れないのだ。もっとも、ヒカルは味方なのだから、比べる意味はあまりない。

共闘する際に、邪魔にならないかが心配なだけだ。

空間に干渉して、突風を作り出し、リゼを吹き飛ばす。衝撃による反動で耐えようとするリゼの周囲に氷の槍を作り出す。衝撃波が槍を粉碎し、セルフアは自身の幻を周囲に生じさせた。

そして、リゼの着地した地面の周囲に、円を描くように火柱を作り出した。衝撃で炎に穴を開けるリゼの鼻先で火花が散った。

「……さすがに、私じゃ押さえられないか」

苦笑して、リゼが首を左右に振る。

「私の勝ち？」

具現力を解除するのを見て、セルフアも力を閉ざした。

「色々されたら、私に勝ち目はないわ」

リゼが頷いた。

セルフアの力は、能力者同士の戦闘を見る度に強くなる。他人の戦い方を見て、攻撃タイミングを学び、様々な攻撃方法を覚えることで空間干渉は強くなっていく。可能なことを知る度に、その想像力が力になるのだ。

手合わせではなく、本気の殺し合いではどうなっていたか判らない。戦闘のプロであるリゼに、セルフアが攻撃する暇があったかどうか怪しいところだ。先手を取られた時点で負けていたかもしれない。

「そろそろ時間だな……」

ダスクの言葉に、セルフアとリゼが注目する。

シユウとの手合わせの決着は着かなかったようだ。二人とも力を解放したままだった。二人ともそれなりに疲労しているところを見ると、ほぼ互角といったところだったのだろう。

「やるな、さすが第一特殊部隊長」

「お前も、予想以上にやるじゃないか」

互いに笑みを見せる。まだ二人とも余力は残しているようだった。殺すつもりでの戦闘ではないのだから、全力を見せることもない。むしろ、全力は隠しておくべきだろう。

「この後、反抗勢力の追撃部隊として、第一特殊特務部隊が派遣されてくる」

ダスクの言葉に、セルフアとシュウは目を見開いた。

ジンたちROVの主力メンバーの存在を考慮した上での判断らしい。ジンたちを含めた上で、ROVに対する追撃を行うための部隊が控えていたということか。

「……教えてもいいのか？」

「もう直ぐそこまで来ているからな」

シュウの言葉に、ダスクが小さく呟いた。もう、知ったから先回りや待ち伏せができるだけの時間はないということなのだろう。

「俺たちは撤退する。生き延びられるかどうかは、お前たち次第だ」
言って、ダスクはリゼとともに数歩、後退した。

「シュウ、どうするの？」

「……セルフアは光と合流した方がいいな。俺たちはこのまま別行動して攪乱しよう」

セルフアの言葉に、シュウはセイイチたちに同意を求めるように見回して告げた。

合流場所は後で連絡を取り合うとして、このまま合流せずに別行動した方がいいかもしれない。むしろ、現状で別行動を取っているのがヒカルなのだから、ヒカルに合流するというよりはヒカルが合流する方がいいということか。ヒカル一人というのも不安だから、セルフアを向かわせるのだろう。いざという時、ヒカルの回復役になるのはセルフアなのだから。もっとも、シュウが言わなかったとしてもセルフアはヒカルの方へ行くつもりだったが。

「なら、セルフアは俺たちと来い。ヒカルの下まで案内しよう」

ダスクとリゼが通路へと走り出すのを見て、セルフアは後を追っ

た。

「少し、安心したわ」

リゼがふと呟いた。

「そうだな、良い目をするようになった」

ダスクも微笑んで、セルファを見る。

「ヒカルが、いるから」

セルファも二人に笑みを返す。

ヒカルが辛い時、傍にいてあげたい。自分が辛い時、傍にいて欲しい。支えたい、支えて欲しい。そんな気持ちだが、きっと、繋がっている。

光がこの場に辿り着いたのは、霞が壁に叩き付けられた瞬間だった。

左肩の傷は酷いものだった。脇腹の傷は、致命傷だ。いくつかの内臓を含めて大きく削り取られている。直ぐにセルファか有希に復元してもらわなければ助からない。

だが、不可能だった。この場には二人ともいない。ここまで来ることが許されたのは光だけだったのだから。セルファたちが追いついてくるまでには、まだ時間がかかる。

少しずつ冷たくなっていく霞の体温を、光は感じていた。彼女が生きていた証を自分の中に刻み付けるかのように。

「……知り合い、だったのか……？」

霞が息を引き取ってから暫くして、彼女と戦っていた晃が驚いた様子で呟く。

彼女が能力者であることを知った時、戦う背中を見た時、昔の自分と被って見えた。それがきっかけだった。無意識のうちに身体が動き、霞を守るように戦っていた。

喘息という持病や、両親の死に塞ぎ込んでいた頃の自分が霞の姿にどこか似ていた気がしたのだ。恐らく、霞は、修に出会うことができなかつた光なのだ。霞にとっては美咲がそうなるはずだった。

だが、信頼関係が深まる前に美咲は命を落としてしまった。

決して、霞の力は強いものではない。覚醒して僅か数日という状態の光でさえ、霞以上の強さを発揮した。光の力が破格過ぎるのだとは解っている。霞が持っていたのは、強固な意思だった。最初から、誰にも弱音を吐くことなく、一人で全てを抱えて戦っていた。光は、霞がパンクしてしまうことを恐れていた。

「……クラスメイト、いや、友達だった」
静かに、光は答える。

最初はただのクラスメイトでしかなかった。どこか近寄り難い、他者との関わりを避けているような少女という印象しかなかった。光が覚醒し、その戦いを見られた後から、彼女に対する見方も変わって行った。彼女自身が能力者であることを知り、その背景を知り、親近感が湧いた。まるで、塞ぎ込んで友達のいなかった頃の自分みたいだ、と。

そんな彼女にも友達がいることを知った時、少し安心すると共に嬉しかった。その相手が、光に告白してきた少女だったことには驚いたが。

(美咲の言ったこと、正しかったんだ……)

霞が好きなのは光かもしれない。かつて、美咲が冗談めかして言った言葉は間違っていないかった。霞と美咲がもっと早く出会っていたら、もっと長く友達でいられたら、違う未来になっていたのかもしれない。

「……殺すつもりはなかった、なんて言うなよ？」
晃が何かを言う前に、光は言った。

「戦うってというのは、こういうことなんだ」
霞ほどの力量があれば、きっと勝ち目のない相手であると見抜けたはずだ。それでも、退くことなく戦ったのは、それが霞の意味だったからだろう。

黙り込んだままの晃は、明らかに動揺していた。視線を彷徨わせ、自分のしたことを悔やんでいるかのようだ。

「……それが、兄貴の選んだ答えか？」

VANの能力者として、晃は霞と戦ったのだ。

それが答えなら、光は晃と戦わなければならぬ。敵になるのであれば、戦うしか道はない。どれだけ晃が誘おうとも、光はVANとの共存には絶望している。

「知り合いだとは、知らなかったんだ……」

晃の言葉に、少しむっときた。

それは、もしも光と霞が知り合いだと知っていたなら、晃は戦わなかったかもしれないということだ。それは、霞の死を無駄にする言葉に他ならない。

「誰だつて、殺されたら悲しむ人はいる」

光は霞を抱えたまま、晃を見上げた。

人を殺すということは、そういうことだ。誰かの命を蹴落として、光たちは生きてきた。今まで殺めてきた人たちの命を背負って、光たちはこれから生きていかなければならない。殺したことを後悔してしまえば、その行為を無駄なものにしてしまうから。たとえば悔を抱えるとしても、その先にあるものを掴むためには避けて通れない時もある。

死んだものは生き返らない。そんな具現力は存在しない。

「そんなことも解らないで戦うつもりだったのか！」

光は叫ぶように言葉を投げた。

戦うだけの覚悟とは、殺すことを正当化する理由ではない。自分の中で決して譲れないものを確立させることだ。どれだけの大義があるかと、他者の命を奪う権利など誰にもない。それでも譲れないものがあるから、無数の罪を背負うとしても光は戦える。セルフアや家族、仲間の命、皆と過ごしていける日常のために、それを脅かす者たちと戦うことを選んだのだ。

たとえばどんな人物が相手であろうと、その命は光にとって、光たちが戦う理由よりも軽い。そう考えられるようになることが、光には覚悟を決めることだと思う。

「だったら、お前は深輝姉さんを殺すことに躊躇いはなかったのか！」

晃の言葉を、光は目を逸らさずに受け止めた。

「躊躇ったら、深輝姉も含めて皆死んでただらうね」

「お前……」

光の返答に、晃は口籠る。

父親のいここである深輝が光の糧となるために敵として現れたことを、晃は知っている。そう思った。VANの中にいたのだから、出会っていても不思議はない。部隊長でもあったのだから、深輝が晃と話すことだって不可能ではなかったはずだ。

深輝の命は、光が背負う。彼女の思いを無駄にしないために、光は立ち止まらずに歩き続けなければならない。アグニアを倒し、VANを壊滅させて、平穏な日常を手に入れることが、彼女に報いることだと思っから。同時に、それは光が戦う目的でもある。深輝の思いと一致しているからこそ、光はもつと強くなっていかなければならなかった。そして、一致しているからこそ、戦うのは辛かった。だが、躊躇うことは許されない。

深輝の意思は固かった。自分の無力さに絶望し、選んだのが、光たちに思いを託してこの世を去ることだったのだから。

「後悔がないなんて言わないけど、俺にはそれを抱えてでも欲しいものがあるんだ」

そのために、迷うことは許されない。

「俺には、お前のやり方が正しいとは思えない」

晃の言葉に、光は溜め息をついた。

「これは、もう戦争なんだ」

善悪の問題ではない。

何のために戦うのか、思いの戦いだ。譲れないものを抱えたもの同士の戦いなのだ。そこに善悪などという観念は必要なく、意味もない。どちらの主張にも正しい部分があり、だからこそぶつかり合い、一方を否定しなければならぬ。互いに相手の意見を受け入れ

るつもりがないのだから、否定してでもぶつかっていかねければならなかった。

そうしなければ、光たちは殺されることを受け入れるしかなかったのだから。

「俺は俺であるために戦う。俺だけじゃない、皆も同じだ」

光が光であり続けるために、大切なもの、自分にとっての全てを守り抜くために戦うことを決めた。それは、今この戦いに身を置いている者全てに言えることだ。

ただ、光の場合は刃のような復讐ではなく、希望のために戦うと決めたのだ。

「……叔父さんと香織さんが結婚したこと、知ってるのか？」

光の言葉に、晃は目を見開いた。

「香織さんはもう、妊娠もしてるんだ。知らないだろ？」

孝二と香織も、戦う決意をしている。力がない者なりに、現状を生き抜こうとしているのだ。ようやく結ばれた二人だ。その生活を守りたい。安心して暮らしていけるようにしてやりたい。

身近にいて戦えるのが光だけだから、二人の生活を守るのは光の役目だ。

「……俺も、セルファと生きて行きたい」

一度、死ぬ寸前まで追い込まれた時、強く思った。

まだ死にたくない。まだ生きていたい。まだ、セルファと一緒に過ごしたい。共に笑っていたい。その想いは、光だけのものだ。誰にも掻き消すことなどできない。

どれだけ力を持っている相手でも、この想いだけは譲れない。

「……好き、なのか？」

晃が問う。

「俺は、セルファが好きだ」

これだけは胸を張って言える。光はセルファに好意以上の感情を抱いている。彼女だけは守り通したい。他の何を失うとしても、選択肢の中にあるなら、最優先でセルファを守るつもりだった。

左手の薬指には、セルファから貰った答えがある。それを見てか、晃が目を丸くする。

「だから、俺は兄貴が敵になっても退かない！」
光は言い切った。

たとえ晃が相手でも、敵として光たちを脅かす存在になるのであれば、倒すしかない。抵抗が全てなくなったわけではないが、以前と違って迷いはない。

「……話は終わったか？」

ダスクの声に、光は振り返った。ダスクがリゼを連れて歩いてくる。

「ヒカル……」

セルファも一緒にいた。修と有希がいないことは気に掛かるが、セルファが無事だったことに安堵する。同時に、ダスクにも感謝した。晃と話す場を与えてくれたことに。

「……退くぞ、アキラ。時間だ」

ダスクの言葉に、晃は複雑な表情を浮かべる。

身を退くことへの躊躇いと、実の兄弟と戦わなくて済む安堵、光の腕の中で息絶えた霞への感情、様々なものが見えた。まだ、迷っているようにも見える。初めての実戦で感じるものがあつたということだろう。だとしたら、まだ晃との戦いを避ける術はあるかもしれない。

「ヒカル」

名前を呼ばれ、光は晃からダスクに視線を向けた。

「次に出会った時は、決着をつけよう」

それは、次に出会った時に戦うことを意味している。ダスクも薄々感じているのだろう。光をこのまま放置しておくわけにはいかない。VANにとって脅威の存在となった光に対して、友好的でいられるのもこれが最後ということだ。

これからの戦いで二人とも生き延びることができたら、という前提ではある。ただ、きっと、必ずぶつかるであろうと光は確信して

いた。ダスクの存在を超えなければ、アグニアに手は届かない。第一特殊機動部隊長という、地位を超えていかなければ、光はアグニアと戦うことはできないのだから。

「ダスク……」

敵同士である以上、戦わなければならない。それはずっと覚悟してきたことだ。どれだけ友好的であっても、ダスクはVANの人間だ。同時に、光はVANを潰そうとしている。

戦うことは、避けられない。

背を向け、急速にダスクたちが遠ざかって行く。

光は、抱えたままの霞の亡骸に視線を落とした。このまま、この場に彼女を置いていくべきだろうか。霞の死を伝えたら、ROVのメンバーは埋葬してくれるだろうか。

「……どうして、してあげなかったの？」

セルフアが小さく呟いた。

一瞬、何のことを言っているのか判らなかった。だが、直ぐに気付く。

「……見てたんだ？」

霞が死ぬ間際の光とのやりとりを、セルフアは聞いていたのだ。空間干渉で見えていたのだろう。

「ごめんなさい……でも」

無断で覗き見ていたことを謝って、セルフアが言葉を続けようとする。

「霞は嫌いじゃなかったよ」

その言葉を遮るように、光は言った。

高校で同じクラスになった時から、好きか嫌いかで言えば好きな人物ではあった。嫌う理由がなかったというのもある。他人との付き合いの方が下手なのは光も同じだったから、能力者であることを知る前からどこか自分と似た印象も持っていた気がする。

「霞に告白されるなんて、思ってもみなかった」

光は苦笑する。

「けど、俺はきつと霞をそういう相手としては見てやれない」

もしかしたら、能力者であるとか、戦っているとか、そんな事情や状況がなければ素直に応じてやれたかもしれない。ただの高校生として、付き合っただけかもしれない。けれど、光と霞とでは目指すものが違っていた。戦う理由や、意味が違う。背を向けて、全く違う道を進んでいた。

恋愛対象として見るには、遅過ぎた。

「でも、最後のお願いぐらい、聞いてあげたって……」

「……セルファは、それでも良かったのか？」

どこか辛そうに呟くセルファに、光は問う。

今、光が恋愛対象として捉えているのはセルファただ一人だ。セルファも、同じように光を見てくれているはずだ。それでも、光が霞と唇を重ねることを許せるのだろうか。

セルファが光の肩に触れる。ゆっくりと、光は霞を地面に下ろした。

「中途半端な気持ちじゃあ、できないよ」

たとえ霞がそこまで求めていなかったとしても、中途半端な気持ちで答えたら失礼だ。上辺だけの、形だけのものでもいいと霞が望んでも、光にとってはそれだけでは済まない。現に、霞は死んでしまった。どちらを選んだとしても、辛さだけは残る。

「嘘でしてやったって、辛いだけだろ……」

気持ちのこもらない、形だけのものでは、逆に霞を傷付けてしまいかもしれない。そうなったら、互いに辛いだけだ。最後だからそれでもいいと望んだのかもしれない。けれど、それでは光の気持ちはどうすればいいのだろうか。いくら、致命傷を負っていたとはいえ、一方的過ぎる。

（酷い奴だな、自分でも……）

結局、怖かったのだ。霞と口付けしてしまうことで、セルファに嫌われることが。同時に、霞に嫌われることが。そして何より、状況に流されてしまうことが。霞を好きになっってしまうかもしれない。

彼女の仇を討ちたいと思うようになってしまいかもしれない。自分の生き方を曲げてしまいかもしれない。それを、恐れていた。

あの場ではキスしてやるべきだったかもしれない。それでも、光は本当に好きだと言える、一番大切な人以外にはしてやるべきではないと思っていた。軽々しくするものではない、と。子供じみているかもしれないと思いつながら、結局怖がっているのだと自覚する。

「……彼女には悪いけれど、少し、嬉しかった」
セルフアの言葉に、光は顔を上げた。

「ヒカルが、私を選んでくれてるって解ったから、安心してました」
まるで自分がイヤな人間であるかのような口調と表情で、セルフアが呟く。

その言葉に、どこか安堵する自分がいることを光も感じていた。

「……行こう、セルフア」
光はゆっくりと告げた。

霞は、死にたかったのだろうか。少なくとも、さほど生きること
に執着してはいなかったかもしれない。一度、死に追いやられ生に
しがみついた光にはそんな気がした。だとしたら、安らかに眠るこ
とができただろうか。これからはもう戦うことも、失うことも、傷
付くこともない。

それは逃げだと思う。けれど、光には霞を説得できるだけの言葉
はなかった。生への執着は、光にとっては修やセルフアがいたから
得られたものだ。

もう、眠らせてやろう。彼女の存在は、光や刃たちが憶えている。
戦いはまだ続くのだから、彼女の死を無駄にしないように前へ進む
しかない。いつまでも悩み、悔やんでいるわけにはいかない。

「第一特殊特務部隊が来るらしいわ」
セルフアは光の言葉に一度頷いて気持ちを切り替え、言った。

「何か知ってることはある？」
VANの中にいたセルフアなら何か知っているはずだ。対策が練
られるかもしれない。相手が持つ力を知ることができれば、効果的

な対処法を考えることだってできる。

「この部隊は……」

言葉が途中で途切れ、セルファは吐血した。両手で口を覆っての咳と共に、血が吐き出されている。指の隙間から血液が溢れ、滴り落ちていく。

「セルファ！」

駆け寄る光の目の前で、セルファの脇腹が裂け、血しぶきが飛び散った。外からの力ではなく、内側からの力で突き破られたように見えた。だが、解放している光の知覚には、人や力場の気配は感知されていない。

両膝を着くセルファを支え、仰向けに寝かせて抱きかかえる。

「一体、何が……！」

周囲を見回すが、誰もいない。能力者の気配もないというのに、何故セルファがダメージを受けたのだろうか。いきなりのに、気が動転する。

(そつだ、止血！)

突然のことに、セルファも意識が朦朧としているらしい。肩で息をしている。表情もどこか虚ろで、辛そうな、それでいてどこかぼんやりとした表情で、視線を彷徨わせている。セルファの具現力が解除されていた。

脇腹の傷は、範囲自体は小さいものの、深い。溢れ出す血が、止まらない。吐血も止まらず、喋ることすらままならないようだった。止血しようとして、光は戸惑った。止血するものがない。着ている服の一部を使おうにも、既に霞の血で大部分が汚れてしまっている。ここまで進んできて、少なからず砂埃のついた服で傷口に触れるべきではない。

何かないかと考えて、一つだけ思い当たった。

上着の内ポケットから、光は空色のハンカチを取り出した。やや大きめのこのハンカチなら、傷口を覆うことができそうだった。

傷のサイズに合わせて二回ほど折り畳んだハンカチを傷口に押し

当てる。

「う……」

痛みに呻き声をあげるセルフアを見つめ、光は齒噛みした。

これが、次に戦う相手の力ということだろうか。現時点で、この力が一体どんなものなのか判らない。セルフアは何か知っているようだったが、口封じのつもりなのだろうか。

応急処置をしようにも、セルフアの症状が判らない。吐血と、いきなりの出血では、どうすれば応急処置になるのか判らなかつた。傷口はあるが、何もない状態から生じた傷だ。外傷にも見えない。適切な対処というものが浮かばなかつた。傷口を押さえて出血を押し留められるのかも判らない。何の解決にもなっていないのではないかとさえ思えてしまう。

「それ……大切な……」

どうにか、具現力を解放したセルフアが口を開いた。防護膜で身体を包み、ダメージの進行を抑える。それでどこまで回復できるのかは判らない。

セルフアが傷口に押し当てられ、真っ赤になったハンカチに気付く。それは、かつて美咲から貰ったものだった。セルフアはその時傍にいたわけではないが、このハンカチが美咲から贈られたものであることは知っている。

「大切なのは、誰がくれたかってことだから」

死んだ人間のことは記憶の中にあればいい。確かに、そのハンカチは大切なものではある。だが、今日の前にいるのはセルフアだ。彼女まで失いたくはない。助けるためなら、セルフアの傷の手当てになるのなら、たとえ美咲がくれたハンカチでも惜しくはない。

「修たちと合流しよう、動ける？」

光の言葉に、セルフアは、小さく頷いた。

ともかく、早く修たちと合流した方がいい。戦うにしても、負傷したセルフアを連れたままというのは難しい。何より、今の状態でもセルフアは危険なのだ。こんな状態のセルフアを戦場に置いてお

くわけにはいかない。

一番いいのは、セルフアが力を使って修たちと合流することなのだが、それができるだろうか。セルフアの傷は浅くない。現状、自分の治療すらままならないのだから、移動も難しいかもしれない。下手に動いては、敵とぶつかる可能性だってある。どうすべきだろうか。

「光！」

背後からかけられた声に、光は後ろへ視線を向けた。

「先輩！」

聖一が走ってくるのが見えて、光は安堵の息を漏らした。

彼の力なら、移動も比較的容易だ。それに、聖一はこういう状況での隠密活動に長けている。修たちの下まで安全に移動できると思っ

た。「負傷したのか？」

険しい表情で頷く光を見て、聖一が力場を展開する。

「こっちだ、一度退くぞ！」

頷いて、光はセルフアを抱き上げて立ち上がった。

具現力を解放した光なら、聖一の力場が判る。どこへ飛び込めばいいのか、直ぐに理解した。まずは合流だ。傷の手当や、敵への対策は、皆で考えよう。

セルフアの苦しげな呼吸を聞きながら、光は走った。

第五章

第五章 「失くせないもの」

ベッドにはセルフアが横たえられ、その傍らでは有希が具現力を発動させている。いつも通り、聖一が取ったホテルの一室で、光は修たちと合流した。

状況は芳しくない。そのことに、光はいつになくイライラしていた。

まず、セルフアの容態だ。彼女の傷を塞ぐことはできても、有希の力では根本的な解決にはならないことが判明したのである。光には内側からのダメージに見えたが、それは間違いではなかった。

微生物のようなものがセルフアの体内で体組織の破壊活動をしている、というのが有希の結論だった。同時に、有希の治癒能力で一時的に回復したセルフアは敵の情報を語った。

第一特殊特務部隊長、ウイルス・トライヴァル。それが、今回の敵の名前だ。そして、ウイルスの持つ具現力こそが、セルフアを蝕んでいるものの正体でもあった。

有機物生成能力というのが、ウイルスの持つ力だとセルフアは語った。

「厄介な能力があるもんだな……」

修が小さく呟いた。

有機物、つまり微生物や細菌、ウイルスといったものを創り出すことができる力なのだ。それらを創り出すには力場を張る必要があるようだが、創り出した後は力場の外部でも活動が可能らしい。能力者が具現力を発動させている間は、力場の外でもウイルスや細菌は動き回ることができるようだ。

だから、力場を察知できる光にも存在を把握することができなかつた。

セルファは、ヴァイラスの創り出したであろうウイルスや微生物に感染したのだ。その微生物が、セルファに体内からダメージを与えている。

有希の力では体組織の治癒しか行えない。体組織を破壊し続けている微生物たちを駆除できない有希では、セルファを助けることはできないのである。力場内では存在できないものであれば、光の力場破壊でどうにかできたかもしれない。だが、有機物生成能力は光の力に対して死角になる部分が多い。今も、その死角の部分から攻められているのだから。

有希の治癒速度よりも、ヴァイラスの創り出した微生物の侵蝕スピードの方が速い。このままでは、セルファの体力が持たない。死期を延ばすことしか、有希にはできなかった。

対処法は、一つしかない。

セルファが死ぬ前に、ヴァイラスを殺す。それしか、手はなかった。

そのために、聖一は情報収集のために出かけている。敵が直接攻めてくる可能性を考えて、光と修は待機していた。セルファが危険な状態になっているのだから、VANからの奇襲も可能性としては十分ありえる。下手に戦力を割くべきではない。

だが、苦しんでいるセルファをただ見ているだけしかないというのは辛い。何もできないことが悔しい。

セルファも次第に衰弱してきている。四十度を超す高熱を出しており、呼吸も乱れがちだ。有希の治癒能力で症状の進行速度をどうにか抑えているが、有希の力も無限ではない。全力で拮抗すらしていないのだから、有希にも相当な負担になっているはずだ。

それでも、有希は必死に力を使ってくれている。

合流した直後は会話する余力の残っていたセルファだったが、今では呼吸するのが限界なようだった。荒い息を吐き、目を閉じて身体の内側からくる激痛に耐えている。汗の量も尋常ではない。それが、セルファの状態が危険であることを告げている。

自分でもおかしいと思えるほど、光は苛立っていた。

(くそ……落ち着けよ、俺……！)

合流して、状況を理解して、聖一を送り出して、それから直ぐに、光は冷静さを欠いていた。

考えを集中させることができない。精神集中も上手くできない。何もかもが安定しない。椅子に座れば貧乏揺すりは激しくなり、ベッドに横になればイライラしてじっとしていることができずに何度も寝返りを打つように身体の向きや姿勢を変えてしまう。

こんなにも不安になるものだとは思ってもみなかった。

今まではセルフアの身を案じて、危険に晒さないようにしてきた。セルフアが危険な目に遭うことを恐れていたのも事実だし、そうなることが不安でもあった。だから、彼女を守れるように、刃たちの下で特訓もしてきた。率先して自分が戦うようにもしてきた。

セルフアの命が危険に晒されることも、覚悟の上だったはずだ。彼女が光を支えると言ったことは、自分の身を危険に晒しても光と共にいるということに他ならない。セルフアは戦う覚悟もしていたし、光もそれを認めていた。多少の危険は覚悟の上だったが、今回は光の想像を超えていた。

危険に晒されると言っても、戦場で敵との戦いで直接の攻撃を受けて負傷したりするぐらいだと考えていた。だが、今回は違う。戦場に出る前から、セルフアはダメージを受けた。敵は近くにはないというのに。

同時に、セルフアは攻撃を受け続けている。有希の力も後どれだけ持つのか判らない。聖一が敵の情報を掴んで戻ってくるまで、光には何もできない。

光には、敵と戦う力しかないのだ。誰かの傷を癒したり、移動を簡単にしたり、火や水を操ったりという、他の活用の道を見い出せる力はない。それが、とてつもなく悔しい。

光がどれだけ苛立っていても、状況は変わらない。判っていても、じっとしていられない。

(こんな、気分だったのかな……?)

一度シェイドに殺された時、セルフアは今の光のように不安になったのだろうか。

セルフアはまだ死んではないのだから、差はあるだろう。もしもセルフアが死んだら、光には蘇生させる術はない。有希に回復できない状態であつたなら、蘇生は絶望的だ。

セルフアを失うことが、不安でたまらない。もしも、彼女が死んでしまつたら、最悪の結末から無意識のうちに思考を遠ざけようとしている。それが、苛立ちの原因だろう。

今まで、これほどまでに不安になつたことはなかつた。あつたとすれば、五ヶ月前の修がVANに拉致された時や、三ヶ月前に家族をかき回された時ぐらいか。いや、だとしても、その時以上に光は苛立っている。

両親が死んだ時でさえ、これほどまでに心は揺れなかつた。あの時は、まだ事故死だと思えたから、単なる不運なのだと割り切ることもできた。もう、死んでしまったのだから仕方がないと思えた。悲しかったのも、胸にぽっかりと穴が開いたように喪失感を抱いたのも事実だ。それでも、今、光が抱えている不安や苛立ちとは何かが違う。

「ヒカ、ル……」

苦しげな声に、光はセルフアの傍へと駆け寄つた。

どこか虚ろな視線で、セルフアは光を見つめる。発熱のせいで顔が赤く火照っているようだった。向かい側ではセルフアの左手を両手で握り締め、有希が力を使っている。

セルフアが震える右手を伸ばしてくる。光はそれを両手で包み込むように握り締めた。心なしか、手が冷たい。

「ねえ……もし、私が、いなくなつても……あなたは……」

「そんなことになつたら、俺は世界を道連れに死んでやる！」

悲しげに歪むセルフアの表情に、光は言い返した。

自分の力を全て使い尽くせば、かなりの範囲を巻き添えにするこ

とができるだろう。もしかしたら、地球を破壊することだってできるかもしれない。

今、理解した。セルファのいない世界など、耐えられない。ここに生きる価値を、見い出せない。こんな形でセルファを失ったとしたら、光の精神はきつと崩壊する。全てを巻き添えにして、死んでやりたいとすら思ってしまう。

「ヒカル……」

セルファの瞳が涙で揺らぐ。

「……大丈夫、俺が、必ず助ける」

真っ直ぐにセルファの目を見て、光は言った。

「守ってみせる、絶対に」

光は一度、セルファに助けられた。

シエイドとの戦いで命を落とした光を蘇生させたのは、間違いなくセルファだ。セルファは刃のお陰だと言っているが、そこまで光を持たせたのはセルファの力に他ならない。セルファが、光を救ったのだ。

今度は、光がセルファを助ける番だ。

「光、敵の居場所が判ったぞ……！」

不意に飛び込んできた聖一の声に、光は弾かれたように立ち上がっていた。

部屋の入り口に、聖一がいた。よろめき、壁に肩からぶつかって、どうにか身体を支えているようだった。呼吸が乱れ、額には汗が滲んでいる

「先輩、まさか……！」

光は目を見開いた。

「俺のことはいい……」

壁にもたれかかったままずると身体のバランスを崩し、聖一は膝を着いた。

ヴァイラスの能力に感染しているのだと、直ぐに判った。

「俺の力場を通れば、奴らのいる場所に着く……」

慌てる有希を手で制して、聖一は告げた。

感染したばかりの聖一よりも、セルフアの方が重体だ。有希の力を聖一の方へまで割くべきではない、そう言うかのように、聖一は有希に対して首を横に振った。

「……光、ここは俺が行く」

黙り込んでいた修の言葉に、光は耳を疑った。

「今のお前の精神状態じゃ、戦闘は危険だ」

光が何か言う前に、修が言った。

確かに、自分でも精神状態は不安定だと思う。だが、ここで修に行かせてしまつては、光の苛立ちは納まらない。

「いや、俺は行く」

ゆっくりと、光は聖一の来た方へと歩き出した。

「光っ！」

「……行かないきゃ、気が治まらないんだ」

制止しようとする修に、光は言った。

「そんな状態じゃあ、俺の命を預けられない」

「俺もそう思う」

修の言葉に、光は返した。

共に戦うのであれば、今の光は味方をも巻き込みかねない精神状態にある。敵を殲滅することに意識が向かい過ぎていた。それも自覚している。

「だったら……！」

「だから、セルフアたちを頼む」

反論しようとする修に、光は告げた。

一人で行く、と。

「……たまには少しぐらい、暴れさせてくれ」

修とのやりとりで、少し頭が冷えた気がした。

それでも、胸の奥に燻っているものがある。それを燃やし尽くさない限り、光は前に進めないようにすら思えた。そして、それをするためにはここで戦うのは光でなくてはならない。

やるべきことが決まった途端に、苛立ちは消えて行った。あれほど冷静さを欠いていたというのに、今では随分と落ち着いている。自分にできることがあるのだから、当然といえば当然か。

「皆を、頼む」

言つて、光は聖一の作り出した力場へと踏み込んだ。

修だからこそ、光は安心して仲間の護衛を任せられる。ここで二人とも戦いに出てしまえば、全員が無防備になってしまう。セルフアと聖一はヴァイラスの力で弱っているし、有希はセルフアの回復に全力を注いでいる。逃げることさえままならない状態だ。修の力なら、身動きのできないセルフアたちも含めて簡単に移動できる。仲間を任せるのなら、防衛力の高い修だろう。

最初から共に戦つて来た修だから、光の精神状態を察して止めたのだろう。自分の命と引き換えにしても敵に突っ込んで行きかねなかつたのだから。それに近い言葉も口にした。

だが、それはセルフアが死んだ場合だ。まだ、その時ではない。セルフアを助けられるのなら、自分自身もまた生き延びなければならない。それは修に言われるまでもなく十分に承知している。光がセルフアを望むように、彼女もまた光を望んでくれているのだから。歪曲された空間は数歩で終わった。景色が一変し、建物の屋上らしい場所に出た。

周りには、VANのスーツを着た能力者たちがいる。光を取り囲むように、全員が力を解放して身構えていた。

既に、光も力を解放している。

「……やはり、来たな」

光から見てもっとも奥に位置する、屋根の頂点に、一人の男が腰を下ろしていた。肩膝を立てて、そこに腕を寄せ、更にそこへ顎を乗せるようにして光を見下ろしている。沈みかけた陽光を背にしているために影で顔は良く見えない。

周りの能力者は、ざっと二十人ぐらいだろうか。

「もう少ししていれば、全員に感染させられたんだがな……」

どこか落胆したように、男が呟く。

「さすがはお姫様だ。自分よりも仲間の身を案じるとは」

「どういうことだ？」

ヴァイラスの言葉に、光は問いを放っていた。

「本来なら、お前ら全員に伝染しているはずだったんだよ」

ヴァイラスが溜め息をついた。

有機物生成能力で創り出した微生物は、空気感染するタイプのものだったらしい。それを、空間干渉能力でセルフアが防いでいたというのだ。自分の身体の中だけに留めていたらしい。

どうりで、セルフアは力を使い続けていたわけだ。防護膜による抵抗力の強化よりも、空気感染を防ぐことで光たちを守ってくれていたのだ。そんなことにも気付かないとは、光も相当苛立っていたらしい。

「……ま、一人で来た度胸だけは褒めてやるぜ」

ヴァイラスが口元に笑みを浮かべるのが見えた。

「はっ、よく言うよ」

鼻で笑う光に、ヴァイラスの笑みが消える。

光が一人で来たのは、仲間の存在を気にせずに戦うためだ。度胸試しのためではない。修との連携に意識を割くだけの余裕は、今の光にはない。だから、一人で来た。

「判ってんだぜ、カソウ・ヒカル。お前の力場破壊の弱点はな」

力場破壊能力に明確な弱点はない。ただ、ある程度なら対抗できる能力は存在する。それは、力場の外部に力を作用させることのできる能力だ。

力場の内部に力を発生させるタイプ力では、力場破壊には太刀打ちできない。だが、力場の外部に影響を与えることができる力なら、力を作用させてしまえば力場破壊能力で掻き消すことはできないのである。リゼの衝撃生成能力などがそれにあたる。

そして、ヴァイラスの有機物生成能力もそうだ。力を発生させる前に力場を掻き消すことで妨害はできるが、一度効果を発揮してし

まえばその力場を消したとしても効力を失うことはない。だから、ヴァイラスが差し向けられたのだろう。

追撃部隊としては、最適かもしれない。いわゆる生物兵器的な効果の期待できる有機物生成能力なら、相手の戦闘力が高かるうが低かるうが、感染させてしまえば勝利が確定する。後は敵に殺されぬように身を隠し、逃げ続けていればいいのだ。

「ROVは追えなかったからな、お前らだけでも始末させてもらうぜ」

ゆつくりと立ち上がるヴァイラスは自信に満ちている。

確かに、特務部隊に相応しい力だ。

「……悪い、もういいかな？」

うんざりしたように、光は呟いた。

これ以上、ヴァイラスと会話を続けても意味がないような気がした。それよりも、早くヴァイラスを片付けてセルフアを助けたい。喋っているだけ無駄なのなら、もう攻撃を始めてもいいだろう。

「これから死ぬ相手に語るのも無粋だな」

「俺さ、今、物凄く腹が立ってるんだ」

怒りに引き攣った笑顔をヴァイラスに向けて、光は一步、足を前に運んだ。

その瞬間に、光の身体を覆う防護膜が厚みを増した。身体の内側から、溢れ出す怒りをエネルギーに変えて自分自身に重ねて行く。

「行け！ 油断するな！」

ヴァイラスが叫ぶように号令を出す。

いきなりオーバー・ロードをした光を見て、ヴァイラスも多少なりとも慌てたように見える。弾かれたように周囲の能力者たちが動き出す。全てが何らかの行動で光へと攻撃を始めた。

光は周囲に純白の粒子をばら撒き、向かってくる力場を無音無動作で破壊する。粉雪が舞うかのように、光を中心に純白の粒子が渦を巻いて吹き荒れる。生じる力場を片っ端から掻き消しながら、光はヴァイラスへと真っ直ぐに歩いて行った。

力場による攻撃を諦めた部下たちが、肉弾戦を仕掛けるために突っ込んでくる。

「邪魔だ」

一言言い放ち、光は右手を上空へと掲げ、下へと振り下ろす。

純白の嵐が一瞬で蒼に染まり、豪雨のように周囲へ降り注いだ。

接近してきていた能力者が三人、文字通り蜂の巣のようになって朽ち果てる。屋根の斜面を転がり落ちていく仲間を見て、他の能力者たちが一歩後退った。

それでも、次々と能力者が向かってくる。向けられる力場を、再び周囲に力場破壊の粒子を振り撒いて掻き消す。

「ちっ、面倒だな……」

舌打ちして、光は立ち止まった。

雑魚に構っている暇はない。ヴァイラスの戦略は別に卑怯だとは思わない。特務部隊という性質上、方法はどうかあれ任務が達成されることを優先するのだろう。部下に時間稼ぎをさせるのがヴァイラスの作戦なら、それはそれで在りだ。

もっとも、戦っている光にとっては煩わしいだけだ。

先ほど振り撒いた力場破壊の粒子に、閃光型本来のエネルギーを付与する。蒼白いエネルギーの吹雪を、広範囲に拡散させて敵を薙ぎ払う。足場である屋根すら破壊しながら、一般人に気付かれることも厭わずに光は力を振るっていた。

半径およそ五十メートルほどの範囲の敵を飲み込み、光は崩れ始めた屋根を蹴って大きく跳躍した。

暴風のように荒れ狂うエネルギーを周囲に解き放ち、どうにか逃れた敵たちを追撃する。

「隊長、ここは私が……！」

男が一人、光の攻撃を掻い潜って突撃してくる。

繰り出される拳を、速度が乗る前に手首を弾いた。オーバー・ロード状態の光の防護膜が高エネルギーを纏い、弾くだけで良い手首を破碎する。目を見開く男の顔面にもう一方の拳を叩き込んだ。

エネルギーが男の頭を飲み込み、削り取る。そのまま、光は男の身体を足掛かりに更に跳躍し、上空から敵の位置を把握する。ヴァイラスも含めて、空中から雨のように閃光を降らせた。ヴァイラスはどうか攻撃範囲から逃れたようだったが、他の能力者は全て今の攻撃で殲滅できた。

普段なら、こんな戦い方はしない。一人だけで戦っているからこそできる芸当だ。仲間がいる場所では、味方の立場を破壊してしまうような攻撃は連携を崩すことになる。それに、仲間をも攻撃してしまうことになる。

「これで、お前だけだ」

着地した光は、正面に立つヴァイラスへと告げた。

いくら何でも強過ぎる。そう言いたげな表情のヴァイラスを見据えて、光は走り出した。

VANの情報網では、シェイドと交戦するまでの光のデータしか無かったのだろう。今の光は、あの時に比べても格段に強い。シェイドと渡り合えるレベルにはまだ足りないかもしれないが、力の使い方は上達しているはずだ。攻撃方法は深輝から多くを学んだ。実戦での判断力は刃たちROVとの特訓で鍛えている。

怒りを原動力に戦っていても、どこか冷静でいられる。以前のように、怒りに任せて我を忘れることもなければ、自分の信念を見失うこともない。

抑え切れない感情を理性で導いて力に変えて行けるのが実感できる。

「くっ……」

ヴァイラスが歯噛みする。

有機物生成能力による生物兵器攻撃は、今の光には効果がない。オーバー・ロード状態により、高エネルギーを纏った状態にある光の防護膜はヴァイラスの創り出した微生物を完全にシャットアウトしている。微生物や細菌、ウィルスレベルの攻撃能力では、光の防護膜を突破するだけの力はない。

同時に、光も意図的に防護膜にエネルギーを集約させていた。敵の攻撃を防ぐと同時に、攻撃の破壊力を上げるためだが、何よりもヴァイラスの力を遮断するために。

地面から、植物の蔓のようなものが伸びてくる。ヴァイラスの力によるものだと、直ぐに判った。力場から植物細胞と同じ構造の有機物を作り出し、連結させるように生成していくことで生み出したものだ。力場による制御は有機物の生成で終了していることを考えると、その生成時にどのような性質を持たせるかを決定しているのだろう。この蔓の場合は、恐らく近くにいる者を捕らえるような性質といったところか。

光は蒼い閃光をカーテンのように膜状にして放ち、蔓を丸ごと掻き消した。ヴァイラスが力場から鳥のようなものを発射したが、形がはつきりする前に閃光で飲み込み、力場ごと破壊する。

「何なんだこいつ……！ 化け物か……！」

ヴァイラスには、今まで見せていた余裕は既になかった。

「俺が化け物だとしたら、そうさせたのはあんたらだ」

もし、VANが光に対して寛容だったなら、手出しすることはなかったのなら、戦うつもりはなかった。光を鍛えたのはVAN自身でもあるのだ。この化け物じみた強さも、VANとの戦いで手に入れたものだ。

光をここまでの存在にしまったVANも化け物と呼んでもいい気がした。

「消える」

光はヴァイラスへと手を伸ばした。

上空から蒼白い閃光の柱が降り注ぐ。力場破壊と、閃光型、二つの力を混ぜた攻撃は、ヴァイラスの防御を簡単に突き破る。有機物の壁は閃光型の破壊エネルギーが貫き、力場破壊がヴァイラスの次の行動を阻害する。どうにかかわすヴァイラスへ、光は降り注ぐ閃光の間隔を狭めていく。

狭められた閃光はやがて巨大な一つのエネルギー体となり、降り

注いでいた範囲全てを覆い隠すほどの直径を持つ柱が地面に叩き付けられる。爆発のようにエネルギーが炸裂し、衝撃波を周囲に振り撒いた。

立っているのは、光だけだ。

「これで、助かったよな……？」

周囲を見回して、光は呟いた。

ヴァイラスの気配は、光の攻撃の直後に途絶した。存在そのものがその時点で消失したはずだ。

これで有機物生成能力の効果は消えるはずだ。セルフアも、聖一も助かる。

空を見上げて大きく息を吐く。そのまま、呼吸と共に光は具現力の発動を解除した。特訓してきたせいかわ、今までのように急激な疲労は襲ってこない。軽い眩暈はあったが、足元がふらつくほどでもなかった。

(少し、やり過ぎたかな……)

破壊された家屋や、穴だらけの地面を見て、光は溜め息をついた。腹が立っていたとはいえ、ここまで一方的な戦いができるとは思ってもみなかった。三ヶ月前、第二特殊特務部隊長に苦戦していたのが嘘のようだ。

それだけ強くなったということなのだろう。刃の強さに近付いているのは、喜ばしいことだ。光は、刃よりも強いだらう相手と戦わなければならぬのだから。

「もう倒したみたいだな」

不意に、空間を裂いて修が声をかけてきた。

「セルフアと先輩は？」

「大丈夫、助かったよ」

修の返事に、光は大きく安堵の息を漏らした。

光がヴァイラスを倒した直後、セルフアと聖一の体内を食い荒らしていた微生物が自壊したらしい。それにより、有希の力で完治させることが可能になった。

感染からの時間が長かったセルフアはもう少し有希の力が必要だが、聖一の方は問題ないようだ。

光は修の作った裂け目からホテルの部屋へ戻り、眠っているセルフアを見つめた。先ほどまでとは違い、顔色はだいぶ良くなっている。熱も引いたらしく、容態も落ち着いたようだ。

「悪い、修、俺も少し寝るわ」

セルフアが助かったことで、どっと疲れが押し寄せてきた。

今までイライラしていたせいか、安心した時に精神的な疲労が大きい。緊張の糸が途切れて、気が抜けた。それだけ安心したということもあるのだろう。今まで苛立っていた分、ゆっくりしたかった。

「あいよ、お疲れさん」

そう言って、修は光に笑みを見せると聖一とアルトリアを連れて部屋を出て行った。有希は部屋に残ったが、セルフアの傷が癒えたら修の方へ行くに違いない。

修は聖一と今後の行動を話し合うのだろう。第一特殊特務部隊を壊滅させられた戦果は大きい。VANにも痛手になっているはずだ。次にどう動くか、聖一が持ってきた情報と総合して考えるのである。光はベッドに倒れ込んで、もう一度大きく息をついた。目を閉じると、直ぐに眠気が襲ってきた。セルフアが助かった、それだけで、何も考えずに眠りに着くことができそうだった。

それから少し経って、目を覚ました光はバスルームでシャワーを浴びていた。

降り注ぐ湯を頭から浴びながら、壁に両手ついて床に視線を落としている。

セルフアはまだ眠っている。有希の姿はなく、電気も消えていた。時間的には、もう夜だ。

「……………」

唐突な胸の痛みに、光は呻き声を嘔み殺した。

内臓の全てを手で握り締められているかのような圧迫感と、鈍い

痛みが込み上げてくる。壁についた両手で身体を支えたまま、光は痛みが治まるのを待った。

心臓の鼓動は早くなっているのに、上手く血液を送り出せていないような錯覚に陥る。貧血に近い症状かもしれない。一瞬ではあるが、視界が二重にぶれる。痛みには耐えながら、ゆっくりと息を吐く。痛みそのものを、それで外に押し出そうとするかのように。

多少なりとも長い時間オーバー・ロードをしてしまった。確実に寿命は減っているだろう。

(まだ、大丈夫だよな……?)

全身を圧迫するような重さに耐えながら、自問する。

オーバー・ロードは最後の手段であることは、光自身も理解している。常に力を解放し続けることのできるアグニアを倒すためには、オーバー・ロードが必要不可欠だろう。相手はオーバー・ロードを続けることができるのだ。いくら光が力場破壊を使えると言っても、光の反応速度を超えた動きをされては意味がない。

できるだけ、オーバー・ロードをする余裕は残しておく必要がある。

あと、どれだけオーバー・ロードができるだろうか。これまでの戦いで消費した寿命はどのぐらいなのだろうか。セルフアの力でも、はつきりとは判らない。光の寿命も、消費した寿命も、把握できない。ただ、寿命の方はセルフアの力で何となく、曖昧ではあるが知ることができる。

それが正しければ、およそ五十年分の寿命を使ってしまったことになる。しかし、光の寿命は判らない。だから、あとどれだけオーバー・ロードができるのかは判らなかつた。

ヴァイラスの部隊は、オーバー・ロードせずとも殲滅できたかもしれない。それでも、光は感情を抑え切れなかつた。いや、オーバー・ロードをしても、素早く敵を倒したかつたのかもしれない。何より、セルフアを救うために。

「ヒカル……」

痛みが治まったと思った直後、そつと、セルフアが光の背中にもたれかかるように触れた。

「セルフア！」

突然のことに、光は驚いていた。

いつの間に入ってきたのか、気付かなかった。それだけ、光の意識が別の方に向いていたということだろうか。

振り返ろうとして、セルフアがバスタオル一枚しか身に付けていないことに気付き、慌てて顔を背ける。

今まで、一緒に風呂に入ったことなどなかったから、不意打ちだった。まさか入ってくるとは思ってもみなかった。

「……もう、大丈夫なのか？」

「うん」

光の言葉に、セルフアは頷いた。セルフアの身体が触れたままの背中、光はその動きを感じていた。

シャワーから流れる湯が、光の背中を伝ってセルフアの肌を濡らしていく。

「あなたのお陰」

「俺には、戦う力しかないから」

優しい声に、光は苦笑する。

皆のような特別な力は、光にはない。光の力は純粹なエネルギーだ。何かを破壊し、掻き消し、削り取る力しかない。もう一つの力も、相手の力場を破壊するものだ。能力者と戦うためだけの力しか、光は持っていない。

だから、光がセルフアを助けるには、敵対する相手を倒すという一つの手段しかない。

「……オーバー・ロード、したのね……」

きつと、光の寿命が減っていることに、気付いたのだろう。

「セルフアを助けられるなら、寿命を減らしたって構わないよ」

光は言った。

彼女を一刻も早く助けたかった。そうしなければ、彼女が死ぬか

もしねなかった。オーバー・ロードによって寿命を削ってしまうとしても、セルフアの命を救えるのなら高い代価ではない。

それに、オーバー・ロードは光の感情だ。それだけ、セルフアが大切だから、オーバー・ロードするほどの感情が生まれた。

「ねえ、ヒカル……」

「セルフア？」

少し寂しげな声で名を呼ぶセルフアに、光は次の言葉を待った。

「私たち、勝てるのかな……？」

弱気なセリフに、光は直ぐに言葉を返すことができなかった。

このままでいいのか。

そんな疑問は光の中にもある。このまま、戦い続けることでVANを倒すことはできるのだろうか。晃に対し、光はこの戦いが既に戦争であると口にした。これから、VANは本格的に動き出すと聖一も言っている。

このままの戦い方で、光たちはVANを叩くことができるだろうか。光の寿命の問題もある。オーバー・ロードせずともアグニア以外の敵に勝てるようになればいい。だが、それを敵が許してくれるとは思えない。光が腕を上げれば、敵もその分訓練などを重ねてくるはずだ。

シェイドを超えるのは難しい。まだ、刃を超えてもいないのだ。

かといって、真正面から突っ込むのも無謀ではないだろうか。アグニアはシェイド以上の存在だ。だとしたら、光はもっと強くならなければならない。ただ戦うだけでなく、戦略や作戦も考えるべきだろう。

「……勝ちたいよな」

光は、希望を口にしていた。

勝てるかどうかは、まだ判らない。実際に戦わなければ、結果は判らないはずだ。勝てる、と断言できるほど、光は自分の実力が着いているとは思っていない。だが、勝てないなどとは言えない。戦う前から、諦めるわけにはいかない。諦めてしまえば、光の今まで

の戦い全てが無駄になる。

「……いや、勝たなきゃいけない」

自分に言い聞かせるように、光は呟いた。

具現力の特性だけなら、光とアグニアはほとんど互角だ。最後にはどれだけ思いが強いかにかかってくるだろう。強気になって楽観視するのも問題だが、弱気になっても駄目だ。

前へ進むしかないのだから、前へ進むと決めたのだから、もう逃げることなんてできない。

(雰囲気、ないなあ……)

セルファに気付かれないように、光は苦笑した。

バスルームに二人きり、しかも裸でいるというのに、空気は重い。いきなり入ってきていたセルファに最初は光も驚いてどぎまぎしたが、彼女の言葉に、自分の応答に、意識は別の方へ向かって行った。

「私、不安なの」

セルファが小さく漏らした言葉に、光は無言でシャワーを止めた。

「……あなたがいなくなってしまうことが、怖い」

「俺は……」

きつと、光の死は避けられない。今直ぐではないにしても、寿命を消費して戦いを乗り越えてきた光は、セルファよりもかなり早く生を全うするだろう。アグニアを倒した時点で、光の寿命はどれだけ残っているのだろうか。セルファと、どれだけの年月を過ごせるのだろうか。

「……シャワー、浴びるだろ？ 俺はもう大丈夫だから、先に上がるよ」

何も答えられず、光は話を逸らした。そう言って、そっとセルファの横を通り過ぎてバスルームを出る。備え付けのバスローブを身につけて、濡れた頭をバスタオルで拭きながら、光はベッドに腰を下ろした。

いずれ、光はいなくなる。おおよそだとしても、五十年もの寿命を消費している光は早死にするのは確実だ。アグニアを倒せたとし

ても、そう遠くない未来にセルフアを残して死ななければならない。光に、何ができるだろうか。彼女が望むことは、光が生きることだ。できる限り長い時間、セルフアと共に過ごすことだ。だが、オーバー・ロードをしてきた時点でそれはもう叶わない。

（俺は、何もできないのか……）

バスタオルごしに、光は乱暴に頭を搔いた。

彼女のためにしてやれることがないかと考えてみても、良い案は思い付かない。

折角、心の底から生きたいと思えたのに。生きる理由を、見つけられたと思ったというのに。

両膝に両肘を突き、両手で顔を押さえ、光は大きく溜め息をついた。

嘘でも、勇気付けてやれる言葉を口にすべきだったのだろうか。

余計に辛いだけかもしれない。セルフアは、光よりも精確に物事を把握できる力を持っている。答えたとしても、気休めにすらならないかもしれない。気休めを言っても、彼女は喜ばないのではないだろうか。

バスルームのドアの開く音が聞こえた。

隣のベッドに座るかと思っていたセルフアは、光の隣に腰を下ろした。

「セルフア……？」

濡れた髪と、少し火照った肌が、綺麗だった。

「……ヒカルは、私と、生きてくれるんでしょう？」

泣きそうな顔をするセルフアを見て、胸が痛んだ。

「俺だって、生きたいよ。セルフアと一緒にいたい」

今までは、死にたくないから生きて来た。気楽に遊びながら暮らしたくて、生きたいと思えた。まだ、もっと遊びたい、楽しいことをしていたい、笑っていたい、そんな思いが戦う原動力になっていた。

だが、今は少し違う。今までと同じ思いもある。しかし、それ以

上に、セルフアと一緒に時を過ごしていきたいという思いが強くなっている。彼女といることが、楽しく、心が安らぐ。もっと、この思いを感じていたい。

「でも……」

光は言葉に詰まる。

戦わなければいけない。寿命を削ってでも、戦わなければセルフアと過ごす平穏な日々を手に入れることは叶わないから。それが、セルフアの望むことではないと知りながら、それでも戦うことを選んだ。今までの自分自身を無意味なものにしないために。死んでいった者たちの命を無駄にしないために。

「……私、怖い」

セルフアが呟く。

「あなたのいない世界なんて、耐えられない」

「俺だつて、同じだよ」

もし、セルフアが死んでしまったら、光はきっと今まで通りの日常には戻れない。今までみたいに笑うことはできなくなるだろう。他の誰かが死んだ時も、落ち込むことはあった。それでも、その死を乗り越えて強くなることができた。だが、もしもセルフアが存在が光の前からいなくなってしまうたら、立ち直ることはできないかもしれない。

「俺は、セルフアが好きだ。ずっと、一緒にいたい」

セルフアの目を見つめて、光は言った。

ずっと一緒にいることはできない。判っているても、その気持ちは抑えられなかった。彼女に、自分の気持ちを伝えたい。彼女の記憶の中にだけでも、自分の存在を刻み込んでおきたい。

「私だつて……！」

セルフアは光に抱き付いて、叫ぶように言った。

直接触れた肌の温もりに、一瞬心臓が跳ねる。まだシャワーの熱を帯びた肌に、彼女の柔らかさを感じる。自然と、光はセルフアの背中に手を回していた。

ずっと、こうしていられたら、どんなに幸せだろうか。そう思えてしまうことが、逆に辛い。

「ねえ、ヒカル、このまま……」

小さくなっていくセルフアの声に、光はその先の言葉を理解する。「……え、あ、でも、いいのか？」

一瞬、頭の中が真っ白になる。ここまで考えていた全てが頭の中から押し出されるように掻き消されたようだった。唾を飲み込んで、少し恥ずかしそうに目を逸らすセルフアを見つめる。

上目がちに光を見て、セルフアは小さく頷いた。ゆっくりと、どちらともなくベッドへと倒れ込む。

もともと、しっかりと着込んではいなかったらしい、はだけたバスローブから、彼女の身体が見える。改めて、セルフアは華奢だと思った。けれど、綺麗だった。まだ乾き切っていない濡れた髪はベツドに広がり、カーテンの隙間から差し込む僅かな月明かりを反射して輝いている。僅かな明かりが照らし出す、セルフアの姿はどこか幻想的で、それでもその存在を主張していた。

いつの間にか、仰向けのセルフアと向かい合うように、光は彼女に覆い被さるような体勢になっていた。

「えと、その……初めて、だから、優しくして、ね……？」

恥ずかしそうに目を細めるセルフアが、とてつもなく愛おしく感じた。少し紅潮した頬と、仕草に、自分の心拍数が上がっていくのを、光は感じていた。

「……頑張る」

それだけ返すのが、今の光にはやっとだった。

第六章

第六章 「修」

カーテンの隙間から差し込んだ陽光に、光は目を覚ました。部屋の中はまだ薄暗く、陽射しが当たっているのは光の顔ぐらいだった。時間的にはまだ昼前だが、朝とは言い難い。十時を過ぎたぐらいだった。

ゆっくりと身を起こした光は、直ぐ隣で眠っているセルフアに視線を向けた。

普段は年齢以上に大人びた表情を見せているが、やはりセルフアはまだ少女だ。こうして見ていると、安らかな寝顔には、まだあどけなさが残っているのが判る。無防備に眠る表情は可愛いものだった。

「……………はぁ」

裸に近い自分の格好に、光は昨夜のことを考えて小さく息を吐いた。

（全部終わってからにしようと思ってたんだけどな……………）

生きるための理由として、最後までとっておくつもりだったことだった。戦い終えて、生き延びることができたなら、と、そう思うことで戦う力に変えようとしていた。生き延びたいと思うための要素にするつもりだった。

（俺、死ぬかもな……………）

アグニアと戦って、相打ちになって死ぬかもしれない。一瞬、そう思ってしまった。

もしかしたら、セルフアはアグニアと戦って光が死ぬことを覚悟しているのかもしれない。だから、アグニアの下へ辿り着く前にすることで、子を生そうとしたのかもしれない。子供ができれば、光が死んだとしてもセルフアは生きていける。いや、生きたいと思え

るはずだ。光の存在を、後の世代に伝えていくことができるのだから。そして同時に、光との子供なら、きっとセルフアにとっては大切なものになる。

そこまで考えて、光は苦笑する。いくらなんでも考え過ぎか。

そう考えてしまう自分が打算的過ぎて少々嫌気が差した。

(……それとも、これはこれで、かな)

考えを切り替えてみる。見方を変えれば、より生き残ることに意識を向けられそうな気もする。

子を生じたとしても、光が死んでいいという理由にはならない。

自分の子を見たいとも思う。なら、光は今よりもっと生きるために足掻かねばならない。

同時に、早くアグニアを倒さなければならぬ。アグニアがいることで、光たちの生活が脅かされているのだ。こんな状態の世界に、自分の子を放り込みたいなどとは思わない。

(違うよな、きつと)

首を小さく左右に振る。

セルフアは今の気持ちを紛らわしたかったのかもしれない。光もそうだ。辿り着かなければならない目標は見えていても、そこへ続く道の果ては見えない。寿命を削ることを良しとしなくても、寿命を削っても戦わなければならぬ矛盾を抱えて、多くの願いを託されて、ひたすら走り続けてきた。

歩くことも、立ち止まることも、ほとんどしていない。穏やかな日々なんて、数えるほどしかない。いつも、敵に備え、襲撃の準備をして、戦うことを考えてきた。疲れていたのも事実だ。

セルフアはセルフアで、彼女なりに思うところは沢山あっただろう。親と戦うことを選んだ思いや、ダスクやりぜと戦わなければならぬ現実があっても、それでも光と共に暮らす未来を望んでいる。嬉しいことだ。応えてやらなければならない。応えてやりたいと思う。

(そのために、俺に、できること……)

光は、セルファを起こさないようにゆっくりとベッドから抜け出る。

眠ったままのセルファが寒くないようにベッドの掛け布団を整えてから、光はバスローブを脱いで私服に着替える。下着を身に付け、シャツを着込み、ズボンを穿く。上着としてトレーナーを着込んだ。日が差し込んでいるカーテンの隙間をなくして、光は部屋を出るためにドアの方へと向かう。

部屋を出る前に、一度だけセルファに視線を向ける。気持ち良さそうに眠っているセルファの寝顔を見て、決心を固めた。

ドアを開けて、通路に出ると、隣の部屋のドアをノックする。

「修、俺だ」

時間的には起きているはずだ。ノックに気づき、近付いていると予想して光は呼びかけた。

「光か？ どうしたんだ？」

ドアの開けて、修が顔を出す。

「話があるんだ」

いつになく真剣な光の表情に、修も何か感じ取ったように見えた。「珍しいな。まあ、とにかく入れ」

修に促されて部屋の中に入る。

「あ、セつちゃんの具合は大丈夫でした？」

「うん、大丈夫だったよ。ありがとう」

ベッドの一つに座っていた有希に、光は微笑み、頷いた。

部屋の中には、他にアルトリアがいた。部屋に備え付けられたテレビのチャンネルをいじっている。元々アメリカ人であるアルトリアは英語のテレビ番組を普通に見ることができる。中等部の有希には、セルファの力などで翻訳してもらわなければまともに意味を理解するのは難しいところだろう。それは高校を一年の一学期で辞めた光や修にも言えることではあるが。

ただ、こころ、二ヶ月ほどは日本国外にすることが多いため、何となくではあるが相手の言いたいことが判るようになってきた。

「先輩は？」

「情報収集に出てる。昨日の今日だしな」

予想はしていたが、聖一はいないようだ。

第一特殊特務部隊が全滅したことで、VANやそれに関わる組織には影響が出るはずだ。それを調べ、今後の動向を調査する足掛かりにするために情報収集に出たらしい。

「そっか……」

聖一がいる時なら用件も一度で済むのだが、既に出てしまったのなら呼び戻すのも気が引ける。

とりあえず、修と話すだけでも今はいいだろう。

「話つてのは？」

「ああ、これからのことなんだけど」

修の言葉に、光は決意を胸に口を開いた。

「VANの本部に、直接乗り込みたいんだ」

修だけでなく、有希とアルトリアも目を丸くして光に注目する。

「……待て、どういうことだ？」

理解しかねると言った表情で、修は光に問う。

それは、修が考えてきた戦略から逸脱する行為だ。参謀役として色々と作戦を立ててきた修からしてみれば、光の発言は不意打ちだっただろう。

「このままじゃ、駄目だと思うんだ」

光は言った。

このまま、ゲリラ戦を続けても光たちが勝利を得るには長い年月が必要になる。一年経ったとして、この戦いを終わらせられるのか判らない。

VANの蜂起によって、世界中に能力者の存在が認識された。それにより、一般人が能力者という存在に触れやすくなったのは事実だ。一般人が恐れ、避けるとしても、今まで以上に身近な場所に能力者が現れる可能性が出てきた。

結果、能力者として覚醒する人々は増えているはずだ。どの国の

メディアでも能力者たちの動向は注目されているし、一般人の感心も少なくはない。覚醒する者が増えれば、この争いは激化していく。ROVは勢力拡大のために動き回っているし、VANも着実に能力者を取り込んでいる。

この戦いの最中で覚醒する者はROVかVANに分かれると言っても過言ではないだろう。そのぐらい、戦力の奪い合いが起きている。

光たちがゲリラ戦として襲撃し、VANの能力者を葬る速度は決して早いものではない。敵部隊の規模にもよるが、襲撃を行うことができれば一部隊分の戦力を減らすことができるのはほぼ確実と言ってもいいだろう。だが、敵の情報を掴むのも難しくなってきた。

聖一が飛び回っているが、情報屋として中立の立場を保っていた頃よりも明らかに情報は少ない。光の側になったことで、聖一はレジスタンス側と見られている。それまでと違って、聖一が情報収集をできる幅が減ったのは確実だ。聖一の情報ネットワークも、VANに潰されつつあるに違いない。もしかしたら、ROVなどのレジスタンスが意図せず潰してしまったこともあるかもしれない。

「早く戦いを終わらせたい」

光は言った。

光たちがVANの戦力を削る速度と、VANが能力者の仲間を増やす速度、どちらが早いだろうか。全体を見ればVANの戦力を削る速度の方が速いかもれない。だが、光たちだけを見るなら、襲撃が可能になるまで、敵の情報を掴むまでに時間がかかるというのが現状だ。

こちらから仕掛けられる状況になる頻度は少ない。

戦いを長引かせても、犠牲者が増えるだけだ。一刻も早くこの争いを終わらせて、戦うこと無く過ごせる生活を手に入れたい。

「無茶言つなよ、真正面からぶつかって行けるだけの戦力なんてないだろ」

修は首を縦には振らなかった。

確かに、今までは修の言うことに頷いてくれた。VANの本部に直接乗り込むということは、そこに存在する全ての能力者と同時に戦うことを意味する。

一般隊員ぐらいならともかく、隊長クラス全員を同時に相手することとなれば、さすがに厳しいと言わざるをえない。まともに考えて、戦力差がありすぎる。

「戦力なら、ROVにも協力を頼むつもりだ」

「それにしたって数は違う。協力してくれるかも判らないだろ」

光の言葉を、修は否定した。

確かに、ROVに応援を頼んだとしても、数は圧倒的にVANの方が上だ。今まで、明らかに反抗勢力であるROVが存在し続けているのは、四天王と呼ばれる刃たち四人の存在があればこそだ。四人の具現力は自然型の最強種と呼ばれるほどに強力で稀有な能力だ。彼らの戦闘能力は凄まじく高い。彼らが先陣を切って戦うことで、ROVという組織の存在を守り、広めて行っているのだ。

だが、彼らは光たちとは違う。

高い戦闘能力を持ち、地道に増やしてきた戦力を味方に着けることができれば、心強いものはある。だが、彼らが光たちの申し出に快く賛同してくれるとは限らない。

ROVはVANを潰すために存在し、その目的のために集まった者たちでもある。光たちとは行動理念や組織形態が違う。

「説得するさ。それに、刃なら協力してくれると思う」

光にはどこか確信に近いものを感じていた。

VANを叩き潰すためだけに、刃はROVに身を置いている。そして、刃は光のことをVANを倒すための切り札だと見ている。ならば、光がVANを倒すために全面対決を仕掛けると言えば、刃はROVの総力を挙げてその戦闘に参加してくれるのではないだろうか。

恐らく、刃はVANを壊滅させる日を夢見て生きてきたのだろう

から。ここ最近、特訓として刃と手合わせをした時に、そう感じる
ことがあった。

刃が光をまだそのレベルにはないと判断したなら、ゲリラ戦による抵抗活動を止めて、特訓に集中してもいい。刃を認めさせることも必要だろう。そもそも、刃を超えなければ光はアグニアと戦えるレベルにはなれないのだから。だが、それをクリアすることができれば刃は光が戦う際に大きな力となってくれるはずだ。光が刃以上の戦闘能力を身に付け、アグニアを倒しに行くとなれば、刃にとつても悪い話ではないのだから。

「……だとしても、真正面から突っ込むのはリスクが高過ぎる」

現実的に考えれば、VANの本部に乗り込んでいくのは困難だ。

修の力でアグニアの暗殺を狙うとしても、身を隠している間はこちらからも攻撃ができない。攻撃する瞬間にはどうしても、身を晒す必要があった。

セルフアの力で存在を悟られぬようにしたとしても、恐らく同じ空間干渉能力を持つセイナには気付かれるだろう。超越の力でその部分を隠すことができるのか、光には判らない。

アグニアを倒すためには、アグニアと戦うことは避けられない。まして敵陣の最奥部なのだから、アグニア以外にも敵は周りに大勢いるはずだ。アグニアと一対一になればまだ良いが、アグニアの他にも能力者がいるとなれば勝つことは難しい。アグニア単体ですら、オーバー・ロードを続けることができるなどと、破格の戦闘能力を持っているのだから。

理論の上で光の持つ力に敵は無いとは言え、その力を扱うのは一人の人間だ。その反応速度を超える動きや、対応し切れないほどの大量の攻撃に晒されれば危うい。力場を掻き消せるとは言え、無敵というわけではないのだ。同じ閃光型の能力者や、力場から攻撃効果を生みさせて力場外部にも影響を与えることのできる具現力は力場破壊能力に対しても有用だ。

「なら、一つ聞いてもいいか？」

光の言葉に、修は無言で肯定する。

「……お前の見積もりだと、VANを叩くのにあとどれだけかかるんだ？」

「それは……」

問いに、修は口籠った。

常に変化し続ける状況を正確に予測するのは難しい。今いる仲間たちの中では、修が最も先を読む知恵があった。普段から読んでいた軍事関係の本などで、光よりも戦略というものを理解している。だが、どんなに優れた軍師でも完璧に情勢を読むことはできない。ましてや、まともな戦略の通じない能力者の組織を相手にしているのだから、予想だにできなかった状況になることだって十分にありえる。

この戦いを終わらせられるのがいつになるのか、修にだって予想できないはずだ。

「俺は、もうこれ以上戦いを長引かせたくない」

日本では、有希の父親が残した自衛隊内の能力者部隊に協力を取り付けている。だが、彼らは防衛で手一杯だ。戦力としては数えることができない。彼らには孝二や香織を密かに護衛するよう頼んである。VANが二人を攻撃してきても、彼らが光たちの代わりに守ってくれる。だが、相手によっては耐え切れない場合も十分考えられる。

だから、一刻も早く孝二と香織の身の安全を確保するのであれば、光がアグニアを倒す以外に手はないのだ。

もちろん、二人のためだけではない。

戦うことを決意はしたが、可能ならば戦闘は避けたい。相手を殺して、その命を踏み越えて前に進まなければならぬのが、嫌だった。そうしなければならぬとしても、できることならそんなことをせずとも暮らしていけるようになりたい。セルフアと共に、毎日を笑って過ごしたい。

「修だって、そうだろ？」

早く戦いを終わらせて、平穏な日々を手に入れたい。そんな思いは修も抱いているはずだ。でなければ、光と肩を並べて戦ってはいい。それに、修にだって有希という彼女がいるのだ。

(……それに、俺には、もう時間がないんだ)

修の作戦のまま戦っていったとしたら、光は寿命を使い切ってしまいかねない。相手が光よりも強いことだけでなく、今回のように仲間が危険に晒されて激昂し、オーバー・ロードしてしまうこともあるだろう。

光に無茶をさせまいとゲリラ戦を提案してきたことも理解しているつもりだ。修は全員が生き延びられる可能性が最も高く、かつ確実に敵との距離を詰められるように作戦を考えてきた。

だが、寿命を削りすぎた光が勝つためには、真正面からアグニアに向かって行った方が確実だ。残りの寿命が多いほど、オーバー・ロードの時間も効果も大きなものになるのだから。

「だからこそ、着実に戦っていくべきだろ」

修が言う。

寿命のことを隠し続けている光には、説得力が足りないかもしれない。だが、そのことを話そうとは思わなかった。

「どうしても、反対か？」

「ああ、こればかりはな」

光の問いに、修ははっきりと答えた。

「そっか……なら、俺は一人で行くよ」

薄々、こうなるんじゃないかとは思っていた。修なりに皆のことを考えてのことだと理解している。だから、無理についてこいとは言えない。修は修で頑固だ。

一人でも、刃を説得してROVを味方につけて、VANへと乗り込むつもりだった。

「待て、そんな無謀なことはさせんぞ」

修の表情が険しくなるのが目に見えて判った。

「俺が納得するような理由を言わないってことは、何か隠してるん

じゃないのか？」

長い付き合いだけあって、さすがに修は鋭い。

きつと、修を納得させられるだけの理由がなければ、彼の立案した作戦を跳ね除けるような行動をしないと理解しているのだ。

「場所、変えないか？」

質問には答えず、光は言った。

「……そうだな、そうするか……」

その意図を汲み取ったのか、修は応じてくれた。

「修ちゃん？」

「ちよつと二人だけで話し合ってくるよ」

心配そうな声をあげる有希にそう言っていると、修は空間を切り裂き、穴を開けてその中へと入って行った。

光も後を追ひ、人気のない平原へと場所を移す。光が来たのを確認して、修が空間の穴を閉じる。有希やアルトリアを含め、周りを巻き込まぬように。

「俺はこれ以上、誰かが死ぬのを見たくない」
ぼつりと、呟く。

敵であろうと味方であろうと、人の死を見たくない。それは光の正直な思いでもある。いずれ、自分もそうなってしまうからかもしれない。ただ、これ以上、争いを繰り返しても、そこにある命の遣り取りに意味を見い出せない気がした。戦うだけの理由と覚悟はあるが、命を落としたとして、そこに意味や価値を見い出せるだろうか。

そんな戦いを吹っかけたアグニアが許せない。

「……殴り飛ばしても止めるぞ。みすみす死なせたくないからな」
修は具現力を解放したままだった。

「骨折ぐらひは、許せよ」

光も力を解放し、修に視線を向ける。

随分と落ち着いている。光も修も、思いのほか冷静だった。

わざわざ、障害物の少ない平原にしたことがそれを証明している。

周りの建物や人間たちに危害を加えないように、巻き込まないように、何も無い場所を選んだのだろうから。

こんな展開になるだろうことも、予想はしていた。いや、恐らくはこうなるだろうと踏んでいたのかもしれない。力で納得させるのは光も修も望むやり方ではないが、思いの強さを見せるには、これしかないと感じていた。

互いを理解し合っているからこそ、相手の言動に裏を見ようとしてしまう。その言動が本気であるかどうか、深読みしようとしてしまう。どれだけ真面目な顔をしてみせても、それが偽りであるかもしれないと疑ってしまう。親友だからこそ、そういうことをするのはないか、しているのではないか、欺くための演技なのではないかと思ってしまう。

どちらからともなく、歩き出す。一歩ごとに力を込めて、次第に加速していく。

修よりも光の方が早い。具現力としての特性が違うのだから、当然だ。だが、修は力場を展開し、自分の身体を転移させながら光へと向かってくる。空間を壊し、跳び越えて、ジグザグに位置を変えながら向かってくる。

光は真っ直ぐに走った。

修の姿が消える。その瞬間に、光の知覚が周囲に展開される修の力場を感知する。三十近い数の力場が周囲に生じる。光の身体を細切れにすることも厭わない場所に。

光は周囲に純白の閃光を振り撒いた。力場破壊で防ぐと踏んでいるからこそ、修は半ば殺す気がかかってきているのだろう。その覚悟に、光は奥歯を噛み締めた。

今回ばかりは、修を否定しなければならぬ。仲間を想う修の作戦を否定して、光はVANの本部へと乗り込まなければならぬ。そのためには、まず修を乗り越える必要がある。最強の能力者と謳われるアグニアを倒すためには、光自身も同じだけの強さを手に入れないといけない。相手が修だから、親友だから、揺らいでし

まうような決意では届かない。

(……いや、修が優先するのは、安全性なんだろうな)

確実に、安全に、戦っていくことを修は考えているのだ。これ以上、人の死を見たくないのは修も同じに違いない。だから、修は時間をかけてでも確実に戦うことを選んだに過ぎない。オーバー・ロードという切り札に寿命というリミットがある光は、早期終結を望んでいるだけだ。

(けど、俺には……!)

光は拳を強く握り締める。

目指すものは同じだ。光も、安心して過ごせる日常が欲しい。だから、そのために、光は今、この時に危険を冒してでもVANを潰そうと考えた。修のように、今現在の安全性も考えつつ戦うという戦略からはみ出そうとしている。

互いに懐へ飛び込むように接近し、拳を突き出す。修は途中で空間に穴を開けて光の背後から拳を伸ばす。光は力場の位置で攻撃の位置を予測して身を逸らし、その動きから裏拳、回し蹴りへと連続でカウンターを繰り出す。修は空間に穴を開けて器用にかわしていく。背後へと跳ぼうとする修の力場を、光は力場破壊で掻き消した。新しく空間に穴を開ける修の力場を掻き消し、光は飛び蹴りを繰り出す。上体を逸らしてかわす修が生じさせる力場を、光は周囲に白い閃光を振り撒いて掻き消した。着地から足払いへと転じる光へ、修は軽い跳躍からの回し蹴りを返す。下方から修の足を弾くように叩き上げる。空中で回転する身体を、修は空間破壊で地面へ戻し、すぐさま反撃してくる。

方向や位置などお構いなしに、修の攻撃が光へと向けられる。その全てを力場破壊で打ち消して、光は周囲を閃光の帯で薙ぎ払った。空へと逃れた修へ、光が蒼い光弾を投げ放つ。だが、その光弾は修の身体を透過した。

(なに……?)

回避行動すらしなかった修にも驚いたが、当たらない自信があっ

たということだ。

まともを考えて、空間型の修は力場破壊能力を有する光に対して勝ち目はない。力場で空間を包まなければならぬ修の力は、光の力によって攻撃効果を掻き消されてしまう。

それを防ぐために、修は自分の防護膜を力場として空間破壊効果を発動させたのだ。力場と防護膜は実質的に同じものだ。防護膜を力場として力を発動させることは不可能ではない。修は防護膜を力場とし、自分の存在する空間を僅かにずらしているのだ。故に、今の修は物理的な攻撃の一切を受け付けない状態にある。

そのまま、力場をいくつも展開する修に、光は力場破壊を行使する。回避先へ執拗に力場を展開させていく修に対して、光は距離を取ろうとはしなかった。今までなら間違いなく後退していた。だが、今、退くことはしなくなかった。

力場破壊で防護膜を消すためには、そこに込められた精神力を上回る力を出さなければならぬ。修の防護膜を掻き消せるだけの意志があることを、光は証明しなければならぬ。

(修……っ！)

敵意は生まれない。今まで、身近な存在だった修だ。敵意なんて湧く相手じゃあない。それでも、手を抜かずに戦っている。

だが、このままでは戦い自体が終わらない。互いに決定打がないのだ。

修を超えなければならぬ。

心の奥底を奮い立たせる。今持てる力の全てよりも、もっと強い力を、光は欲した。

きっと、このままの戦い方でVANと戦っていれば光たちは全滅してしまう。オーバー・ロードにより寿命を使い切ってしまった時、光がどうなってしまうのかは判らない。だが、戦うことができなくなるということだけは確実だ。そうなれば、まともに敵を殲滅していける者は修しかいない。光と違い、具現力の特性がはっきりしている修は、弱点となる能力者をぶつけられたら勝ち目がない。

修の戦い方では、光の寿命が尽きてしまう。そうならば、修だけで皆を支えて行けるとは思えない。光が戦線離脱した時点で、セルファは戦力からは外れるだろう。きっと、生きることを選んでくれたとしても、戦うことはしないだろうから。

ここで、光が負けるわけにはいかない。修を生かすためにも、皆を守るためにも、光は親友に意志を示さなければならぬ。

憎悪や敵意ではなく、希望や願いで本能の扉を決じ開ける。たとえ今、ここで寿命を削るとしても、その力がなければ前へ進めない。だから、光は心の底から力を欲した。

「修うーっ！」

突き出した拳から前方へと純白の閃光を解き放つ。視界が真っ白に染まる。修の防護膜を強引に削り、掻き消して、閃光は突き抜けた。

「ひいがあるーっ！」

叫び、修が再び具現力を解放する。

空間破壊で目の前に飛び出した修が、右拳を突き出す。光は左手で修の拳を打ち払い、同時に力場破壊を炸裂させる。修の手首の骨に罅が入り、防護膜が消失する。それでも、修は具現力を展開し、光の背後へと跳んだ。光の回し蹴りを、修は左手で受け止める。力場破壊の閃光と共に、防護膜が掻き消される。修の左腕の骨に罅が入る。だが、修だけでなく、光も吹き飛ばされていた。

力場破壊で具現力が封じられる前に、修の掌底が光の脇腹に命中していた。防護膜を力場とし、自分の右手を気付かれぬように移動させて。罅の入っていた右手首が砕けるのも構わずに。

吹き飛ばされながら、修は再び防護膜を張り直し、空間を跳び越えて接近する。光も着地するよりも早く体勢を整え、地に足を着けた時には駆け出している。

視線を逸らさずに真っ向からぶつけあい、光は拳を、修は回し蹴りを繰り出す。それがぶつかり合う瞬間だった。

「やめてええええええええええっ！」

その場に絶叫が響いた。

光と修は硬直し、声のした方へと同時に視線を向けた。

「セルファ……」

そこにいたのは、セルファと有希だった。

部屋からいなくなつた光と修が心配になつて、有希がセルファに言つたのだろう。

「……事情はユキから聞いたわ」

俯いて、セルファが言う。

「だつたら判るだろ、本部への突撃なんて無謀なことはさせたくないんだ」

身構える修の目の前に、セルファは力を使い一瞬で移動していた。光を守るように、修の前に立ちはだかる。

「ヒカルは、オーバー・ロードする度に寿命を削っているわ。だから、これ以上戦いを引き延ばすのは危険なのよ！」

「な……！」

顔を上げたセルファは叫んだ。その言葉に修は絶句する。

「セルファ！」

意図せず、咎めるような声になつてしまった。

「あなたも何で教えてあげないのよ！ またオーバー・ロードして、これ以上命を削らないでよ！」

だが、光へ振り返つたセルファは泣いていた。涙を流しながら、怒りを露わにして光の胸に顔を埋める。

光はセルファの背中に手を回して、目を閉じた。

「……何で、そんな大事なことを言わなかった？」

修が問う。隣には有希が心配そうに修の身体に触れている。恐らく、傷の治療をしているのだろう。有希の身体を防護膜が包んでいる。

修の方はもう戦う気はないらしく、具現力を閉ざしていた。

「長い付き合いだからな、もし、俺の寿命が減るって知ってたら、修は俺を戦わせようとはしなかっただろ？」

恐らく、オーバー・ロードによって光の寿命が削られていると知っていたなら、修は光が戦うことを良しとはしなかっただろう。全ての戦闘行動を自分が背負い込んで戦おうとしていたかもしれない。「これは、俺の戦いでもあるんだ……」

だが、修に全てを任せる訳にはいかない。

この戦いの根底には、光の両親とVANの戦いがある。そして、発端となったのは光の覚醒だ。修に全てを任せるなんてできやしない。自分自身が戦わなければ、光の気持ちの行き場がなくなってしまう。同時に、オーバー・ロードしなければ切り抜けられなかった場面だつていくつもある。

「……それで、どれぐらいの寿命を使つたんだ？」

これからの戦いでオーバー・ロードをしなければいい、と修は言わなかった。光のオーバー・ロードに助けられた場面はあつたし、何よりも光が自分自身の戦いだと感じているように、いつでも決め手となってきたのは光の力だったのだ。

今後、光がオーバー・ロードしなければ勝てないような能力者が現れる可能性は十分にありうる。VANとの決着が長引けば長引くほどに、シエイドのような強い能力者が育つ可能性は増えていく。そうなった時、光のオーバー・ロード抜きで切り抜けられるようになっていいるだろうか。

光一人の成長速度よりも、シエイド並の能力者が何人も育つ速度の方が速いかもれない。VANは組織なのだ。光たちのような極少数の個人グループと違って能力者の鍛錬も効率良く行えるだろうから。

「これで、六十年は使つてる……」

答えたのは、セルフアだった。

修との戦いで、光はオーバー・ロードをした。その上で、修の防護膜を何度も掻き消した。セルフアを助けるために、ヴァイラスに對して行ったオーバー・ロードと合わせて、また十年の寿命を削つたということか。

初めから共に戦ってきた修だ。意志の強さ、精神力は光にも匹敵するほどのものに違いない。実際に戦ってみて、そう思った。今まで戦った能力者は、防護膜を掻き消された瞬間に敗北を悟り、絶望の表情を浮かべていたのだ。だが、修は防護膜を破壊されても再び力を解放して向かってきた。修が光の力を知っていたというのもあるだろうが、捨て身に近い行動になるとしても突っ込んでくるだけの思いがあるのだ。

「そんなに使ってるのか……！」

修はショックを受けたようだった。

光がオーバー・ロードした回数はそれほど多くない。それでも、これだけの寿命を消費するのだ。ほんの数秒のオーバー・ロードで何十日という寿命を削ることになる。それだけの精神力が込められているのだ。凄まじい戦闘能力が発揮できるのも当然と言える。

「アグニアと戦うために、オーバー・ロードは必須だ。だから……」
もう時間がない、その言葉は言わなくても伝わっただろう。修は驚きを隠せない様子で、視線を彷徨わせている。

「……少し、考えさせてくれ」

伏せておいたことも含めて、光が抱えていた思いは全て修に伝わったはずだ。アグニアとの対決を先延ばしにしても、光にはメリツトが少なくなりつつある。

無言のまま、光たちはもといたホテルへと戻ってきた。修は有希と共に、光はセルフアと共に、それぞれの部屋へと。

カーテンの締め切られた薄暗い部屋の中で、光はベッドに倒れ込んだ。仰向けになって、天井を見上げる。

「どうして、シユウと戦う必要があったの？」

セルフアが咎めるような口調で尋ねてくる。仲間同士で戦ったことに、少し怒っているらしい。光と修の仲の良さを見てきたから、戦うという行動に発展したことが信じられないのかもしれない。

そんなセルフアとは対照的に、光の頭は冷めていた。

「……あいつはあいつで、頑固だから」

光は苦笑した。

自分の意志の強さを強引にでも認めさせてやらなければ、修が一度決めた考えを変えることはないだろう。客観的に見れば、光の勝ちだったと言えるかもしれない。ただ、意志の強さでは修も負けてはいなかった。結局、伏せていた寿命のこともばらして、修はまだ納得し切っていないのだから。

「親友なのに……」

「だからこそ、本気でぶつからなきゃ、失礼だろ？」

光は優しい口調で言った。

そういえば、セルフアには親友と呼べる人物はいなかった。ダスクヤリゼは確かに良き理解者ではあったが、親しい友達という関係には見えない。光の下へ来てからできた有希が初めての友達だったかもしれない。

「……俺さ、思ったんだ」

暫しの沈黙の後、光はぽつりと呟いた。

「刺し違えてでも倒す、じゃ駄目だった」

「え……？」

光の言葉に、セルフアは驚きと不安の入り混じった声を上げた。

「絶対に、生き残るんだ」

身を起こして、光は続けた。

アグニアを倒して、この戦いに勝利し、そして生き延びる。相打ちでもいいからアグニアを倒したい、という思いは消えていた。相打ちでは、意味がない。そう思うようになっていた。

「責任、取らなきゃいけないもんな」

言って、光は歯を見せて笑う。

昨夜のことを思い出したのか、セルフアの顔が真っ赤になる。目を丸くして、顔を赤くするセルフアが可愛くて、光はもう一度笑った。視線を彷徨わせるセルフアを見つめる。

照れ隠しなのか、セルフアはリモコンを手にとってテレビをつけた。

だが、その直後、温かな空気は一変した。
テレビの画面には、アルトリアの顔と名前が映し出されていたの
だ。
それも、死者として。

終章

終章 「目指す未来」

光と修が部屋から姿を消して、不安に駆られた有希は眠っていたセルファを起こした。セルファは、有希と共に光と修の下へと向かうことを決めた。

その時、セルファはアルトリアに食料の買出しを頼んだらしい。有希と違って、アルトリアは修に対して盲目的だ。光と修が戦う場面を見て、絶対的に修寄りであるアルトリアが場を混乱させないためにと気を利かせたのだろう。

「そんな……！」

セルファは口元を手で覆い、震える声で呟いた。

テレビでは、アルトリアが街中で殺されたことが報道されていた。ナイフで胸を一突きにされて、死んだと報道されている。

光は腰を下ろしていたベッドから弾かれるように立ち上がり、ドアへと走った。乱暴にドアを開けて、隣の部屋へと向かう。鍵のかかっていないドアを開けて、光は修の部屋へと駆け込んだ。

「修……！！」

アルトリアが殺された、そう言おうとした瞬間、光は気付いた。テレビがついている。

その画面を、修が凝視している。有希が絶句している。

軍事複合企業スコールの会長、アルトリア・スコルジーが通り魔に胸を一突きにされて死亡したという内容の言葉が流れてくる。アルトリアが能力者であることが犯行の動機ではないかというキャスターの言葉が、テレビから聞こえた。

「アルトリアを殺したのは、VANの能力者だ」

聖一の声が部屋の中に響いた。

「駆けつけるのが、一歩、遅かった……」

聖一は、アルトリアがナイフで刺される瞬間を見ていたらしい。ただ、それを阻止できるほど近くにはいなかったのだ。駆けつけようとした時には、アルトリアは刺されていた。

VANの構成員の顔を多く知っている聖一には、アルトリアを殺した相手がVANの能力者だということが判ったのだろう。

「……私が、私が、おつかいなんて頼まなければ……！」

ドアの傍で、光の後を追ってきたセルフアが泣き崩れる。

「いや、セルフアのせいじゃない」

修が呟いた。

「でも……」

「そういうことなんだな……」

ゆっくりと、修が立ち上がる。

その横顔には、はつきりと怒りと敵意が見て取れた。

「この戦いを終わらせない限り、安心して買物もできないってのか……！」

怒りに燃える修の目が、テレビに叩き付けられている。

VANが光たちを狙っているのは知っていた。実質的に戦闘力の低いアルトリアを一人で外に出したのはミスだと言えなくもない。

だが、いくら仲間だからとは言え、常に全員で行動できるはずもない。

一人で街を歩くことのできない世界になってしまったということだ。安心して暮らすことのできない世界に。もしかしたら、死んでいたのは有希やセルフアだったかもしれないのだ。

「光……！」

セルフアの肩を抱きながら、光は修に視線を向けた。

「VANの本部に奇襲をかける……！」

交わした視線に、光は静かに頷いた。

「攻めるのか？」

聖一が問う。

VANとの決戦に臨むのであれば、反抗勢力全てを味方につける

べきだ。聖一は、そのために各地の反抗勢力を繋ぐ架け橋になる。

「光、VANを潰そう、次の攻撃は、本部に対して仕掛けるぞ……！」

「……その言葉、俺はずっと待ってたんだ」

決意に満ちた修の目を見返して、光は言った。

立ち上がり、光は修と拳を突き合わせる。互いの意志を確認し合い、決意を交わす。

「なら、準備を始めようか」

聖一が言った。

全世界の反抗勢力を繋ぎ合わせ、決戦に向けて勢力を掻き集める必要がある。それには時間がかかる。明日、明後日でできることはない。

「じゃあ、俺は訓練に集中するよ」

光の言葉に、修は無言で頷いた。

聖一が勢力を集めている間に、光は可能な限りの特訓を受けるつもりだった。全ての準備が整うまでに、刃を超える強さを身につけなければならない。そのために、特訓に集中するために、ROVの下へと渡る。

特訓と同時に、刃に協力を取り付ける必要もある。

どれだけの勢力が手を貸してくれるのかまだ判らない状態では、作戦も立てられない。見通しが立つまでは、修も光同様、力を鍛えるはずだ。肉体系の強化度合いが低い修は、光とはまた違った方法での鍛錬になるだろうが。

「セルフア……手伝って、くれるよな？」

光は座り込んだままのセルフアに声をかける。

アルトリアの死を引き摺るかもしれない。それでも、引き摺ったとしても、前へ進む。今まで以上に、力強く、速度を上げて。

涙を拭い、立ち上がったセルフアは力強く頷いた。

「……俺たちが望む、未来のために！」

光の言葉に、皆が頷く。その意志を、確かめ合うように。

そして、この瞬間、最後の戦いへと進むための一步を、光たちは確かに踏み出していた。

続く！

終章（後書き）

次回予告

集うのは、立ち向かう者達。

「これで、終わらせるんだ……この戦いを！」

VANとの全面戦争が始まる。

「決着^{ケリ}をつけよう、ヒカル……」

「もう、揺れやしない、戦える」

ダスクと、晁の決意。

因縁との決着。

敵陣を突破していく光たち。

ようやく対峙する、倒すべき、敵。

アグニアによって語られる真意、真実。

「くそ……！ やつとここまで来たのに……！ 俺は……っ！」

そして、戦い、尽きる命。

倒れる、光。

「ヒカルは、私の『光^{ひかり}』だから！」

一人戦う、セルファの叫び。

「奴がもたらすのは『光^{ひかり}』ではない！ 破滅への道標だけだ！」

ぶつかり合い、すれ違う、親子の想い。

譲れない想い。意志。約束。絆。心。

その戦いの果てに

光とセルファが辿り着く運命は……。

次回、『蒼光』最終章。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8904c/>

ライト・プリンガー 1 ~ 蒼光 6 ~

2009年6月25日16時35分発行